7 5期生 宿泊学習の取組み

－平和を自分事として考える新たなカタチの平和学習の提案－

田中（たなか）　真理子（まりこ）

抄録：本稿は、平和学習を軸とし、75 期生（2 年生）を対象に、今年度実施した舞鶴・敦賀での宿泊学習の取組みにおける生徒の学びの成果と課題を明らかにしたものである。シベリア抑留、ポーランド孤児、ユダヤ難民について学ぶ際、現地で肉筆の記録を目にしたり、証言をもとに作られた模型の展示品や語り部による講話を聞いたりすることを通じて、平和についての学びと日常、その文化的歴史的背景とを繋ぎ合わせ、自分事として考えを深めることができた。また、学年・学級の仲間による平和についてのスピーチや教師の講話を聞くことで、相手の考えを受け止め、平和についての見方・考え方について思考を巡らせた。事前・事後アンケート結果や事後学習の課題作文からは、本学習を通じて、生徒が人生をより豊かに生きるためのヒントを得たり、「自分に正直に生きる」という決意を新たにしたりすることができたと分析できる。

キーワード：平和学習、主体的・対話的で深い学び、探究、教科横断的な学習

はじめに

本校では、学校生活の基礎・基本を育み、集団づくりの活性化を目的として、学年ごとに宿泊学習を実施している。1 年生では、入学後すぐハチ高原（兵庫県）に 2 泊 3 日で合宿訓練に行き、学校生活や集団生活の基礎・基本を学ぶ。また討論会を行いながら、学年・学級集団の土台づくりに取組む。学年集団が成長してきた 2 年生では、富士登山に挑み、過酷な状況下でも、ともに励まし合いながら、みんなで頂上を目指す中で、個人と集団の更なる進化を目指す。そして最上級生となった 3 年生では、乗鞍高原（長野県）への修学旅行が行われるなど、生徒の発達段階に応じて宿泊行事を行うことが、本校が理想とする質実剛健な生徒の育成に大切な伝統行事とされてきた。しかしながら、75 期生の宿泊行事に関しては、新型コロナウィルス感染症の蔓延によって、合宿訓練が中止となり、次いで富士登山の中止も決定される不運に見舞われた。富士登山中止の理由としては、登山中や山小屋でのマスクの着用、手洗いや手指の消毒、三密（密閉･密集･密接）の回避の徹底、また体調不良者の別室での隔離や病院への早急な搬送が極めて困難であることから、生徒の安全・安心を確保することが出来ないことが挙げられた。翻って、泊を伴う学校行事は、生徒にとって学校生活で培ってきた基礎・基本を非日常の中で実践し、その大切さを改めて自覚する貴重な学習の機会でもある。また共同生活を通じて、学年・学級の仲間への理解を深め、その繋がりの深化も期待できる。そこで、75 期生教員集団では、富士登山の代替案として、コロナ禍でも実施できる宿泊学習を企画することとした。企画にあたっては、生徒たちの興味・関心を出発点として、本校から比較的近く、医療環境も整った場所への宿泊行事とすることを条件に取組み案の作成を試みた。これらの諸条件から、舞鶴引揚記念館と敦賀ムゼウムを中心にして､班別活動によるフィールドワークや体験活動を盛り込んだ平和学習を企画した。

Ⅰ．今なぜ平和学習なのか ～平和学習に込めた学年教員集団の想い～

本学習を企画するにあたり、なぜ「平和学習」を軸に据えたのかについて述べておきたい。平和学習を柱とするきっかけは、前年度末のある日のある学級の終礼時に行われた学級費の残金の使い道に関する話し合い活動にある。「残金をウクライナに寄付しよう」という意見と「寄付は絶対に嫌だ」という意見の衝突があった。この出来事から生徒のウクライナにおける軍事行動への関心の高さや人道支援に関する意識や考え方の違いを感じ、平和学習を軸に据えた宿泊学習にするという方向性が定まった。

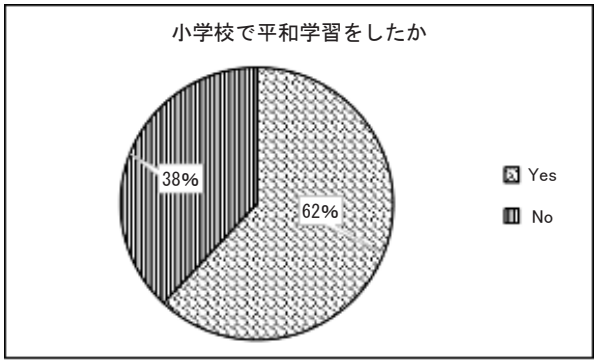
翻って、教育現場における平和学習は、数十年にわたってあまり変化のないまま、戦争の悲惨さや恐ろしさを知る学習であるように感じる。実際、筆者自身も小学校時代に広島に修学旅行に行き、戦争や原爆について学んだ経験がある。しかし、世界中から様々な情報を瞬時に得られる現代社会において、戦争が恐ろしいことはもはや周知の事実である。よって、生徒たちが関心を持って学習に取組める内容の平和学習を実施

するためには、平和学習のねらいをこれまでとは違う視点で捉える必要がある。そのような視点に立ったとき、学級費の残金をウクライナに寄付することは絶対に嫌だと主張した生徒がいるように、戦争を自分に関わる問題として捉える生徒が少なくなっているように思われた。

以上の理由から、本学習では、教科書ではあまり取り扱われることのなかった史実から、平和について考え、その学びが日々の自分の生活に還元できる学びになることを目標とした。そこでたどり着いたのが、舞鶴・敦賀での平和学習である。舞鶴港は、第二次世界大戦の終結後、捕虜となりシベリアで抑留された引揚者を上陸させた港である。シベリア抑留は、知識として生徒たちに定着してはいるが、引揚者がシベリアでどのように過ごしていたか、舞鶴の人々が引揚者をどのように迎え入れたのか、を語れる生徒はいない。また敦賀港は、杉原千畝が発給した命のビザを携えたユダヤ難民を受け入れた港である。杉原氏については、彼の人道・博愛精神に溢れた行動について、道徳の授業などを通じて、多くの生徒が理解しているが、敦賀の人々がどのように難民を受け入れたのか、という問いに答えられる生徒はいない。そこで現地に赴き、本物に触れることから、苦しい状況下においても、相手を思いやるヒトとヒトとの関わりがあった事実を知り、そこから本物に触れる大切さを実感させたい。過去・現在・未来という時を経ても変わらない人生において大切な「生命力」「人間愛」「思いやり」「家族愛」などについて、立ち止まって考える機会になるような試みを目指した。今回の学びは、新型コロナウィルス感染症の蔓延によって、様々な事を諦めざるを得なかった生徒たちに、どんな逆境の中でも前向きな気持ちを大切にし、他者を思いやる心を忘れないといった、生徒たち一人ひとりの心の成長にも繋げることができる取組みにも繋がるよう願いを込めた企画である。

Ⅱ．平和について「自分事」として考える創意工夫

学校での平和学習は、各教科で工夫を凝らしながら実施されてはいるものの、学校行事などをはじめとした様々な事情により、二次的なものになりがちである（国際教育辞典、1991）。本校においても、平和学習はこれまであまり行われては来なかった。図 1 は、75 期生を対象に、小学校での平和学習に関する有無を問うアンケート調査を実施した結果である。結果から、約 4 割の生徒が平和学習を小学校で受けていないと回答している。このことからも、平和学習の実施は、各学校のカリキュラムマネジメントや教員の意識によるところが大きいと分かる。さらに表 1 は、平和学習を行ったと回答した生徒に対して、その取組み内容を聞いた結果である。



（図 1）小学校で平和学習に取組んだ割合

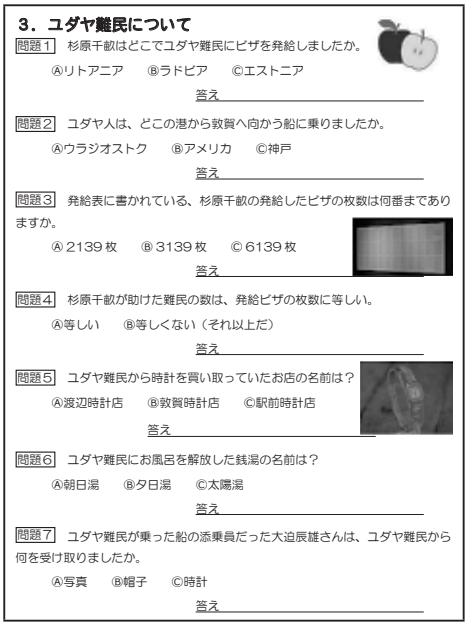
教科	内容	生徒数
行事	修学旅行で広島へ行った。	16
	広島・長崎での原爆投下、沖縄の陸上戦	9
	戦争についてのビデオ（映画）や動画を見た（WWⅡなど）	6
	戦争について、戦争の悲惨さについて学んだ。	5
行事	校外学習（ピースおおさか）で学んだ。	4
	沖縄戦について調べた。（修学旅行で行く予定だったため）	3
	戦争を経験した方のお話を聞いた。	2
	平和が大切だと考えさせるような動画	1
	戦争の歴史、平和とは何かについて考えました。	1
行事	修学旅行で先輩の疎開先へ行き先輩方を弔う。	1
	戦争体験者のお話や本の読み聞かせ、レポートの作成	1
	被爆者の話を聞く・すいとんの試食・語り部さんの話を聞く。	1
	戦争に関する本の紹介文を書いた。	1
	毎年夏休み中の８月６日に登校日が設けられ戦争について考えた。	1
道徳	道徳で学んだ。	2
	「六千人の命のビザ」を読みました。	1
国語	「ちいちゃんのかげおくり」で学んだ。	1
	佐々木貞子さんの白血病について学んだ。	1
	杉原千畝さんについて、命のビザについて	1
総合	総合の学習の一環で他国と日本を比較(?)し、平和について学びました。	1
	兵庫の阪神淡路大震災について	1

（表 1）平和学習の取組み内容

結果から、国語や道徳、総合的な学習の時間や宿泊行事など、様々な形で平和学習に取組んできたことが分かる。取組み内容に関しては、生徒たちの多くが戦争について学んでいる。具体的な取組みとして、広島への修学旅行や広島・長崎・沖縄についての学びなどを挙げる生徒が多く、平和学習がこれら三県の学習と密接に結びついていることが明らかである。一方、生徒の中には「平和が大切だと考えさせるような動画」と回答する生徒もおり、平和学習を一方的な教え込みのように捉えている生徒も一定数いることが分かった。

以上のことから、75 期生の中には、平和学習に触れたことがない生徒、「平和学習＝戦争」という構図で捉えている生徒、平和学習が一方的な教え込みによって、「平和は大切だ」とだけ捉えている生徒など、形式・形骸化した平和学習を受けてきた生徒がいることが分かった。このことを踏まえ、本学習では、学習の目的とその達成を目指した課題設定をもとに、学びのプロセスについて熟考し、知識レベルの理解から思考レベルへと学びを繋げられるような段階を踏んだ「教材づくり」に取組んだ。仕上がったものが、以下の図 2、3

に示したワークシートである。生徒一人ひとりの平和観を問う課題作文を最終課題とし、作文作成時に必要となる個人の思考をメモとして残し、学びを振り返る図 3 のような自由記述をメインにしたものを複数箇所に取り入れた。このような工夫により、生徒一人ひとりの思考のプロセスが可視化され、各々の学びを深める手立てとした。


3．ユダヤ難民について

問題1　杉原千畝はどこでユダヤ難民にビザを発給しましたか。
Ⓐリトアニア　Ⓑラドビア　Ⓒエストニア
答え

問題2　ユダヤ人は、どこの港から敦賀へ向かう船に乗りましたか。
Ⓐウラジオストク　Ⓑアメリカ　Ⓒ神戸
答え

問題3　発給表に書かれている、杉原千畝の発給したビザの枚数は何番までありますか。
Ⓐ 2139 枚　Ⓑ 3139 枚　Ⓒ 6139 枚
答え

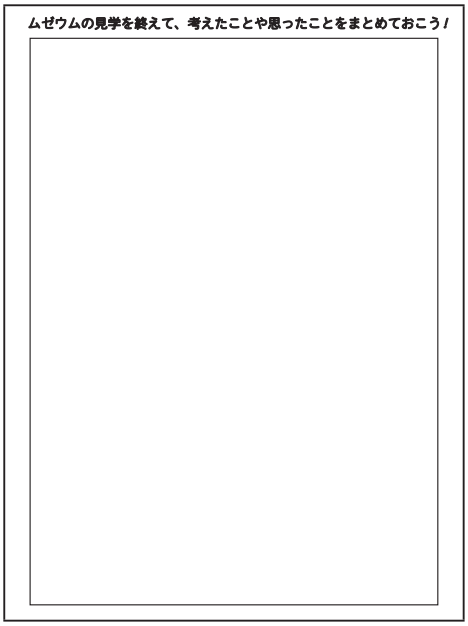
問題4　杉原千畝が助けた難民の数は、発給ビザの枚数に等しい。
Ⓐ等しい　Ⓑ等しくない（それ以上だ）
答え

問題5　ユダヤ難民から時計を買い取っていたお店の名前は？
Ⓐ渡辺時計店　Ⓑ敦賀時計店　Ⓒ駅前時計店
答え

問題6　ユダヤ難民にお風呂を解放した銭湯の名前は？
Ⓐ朝日湯　Ⓑ夕日湯　Ⓒ太陽湯
答え

問題7　ユダヤ難民が乗った船の添乗員だった大迫辰雄さんは、ユダヤ難民から何を受け取りましたか。
Ⓐ写真　Ⓑ帽子　Ⓒ時計
答え

（図２）敦賀のワークシート（知識重視）


ムゼウムの見学を終えて、考えたことや思ったことをまとめておこう！

（図３）敦賀のワークシート（思考を記す自由記述）

Ⅲ．本研究の目的

本学習を新たなカタチの平和学習として提案するため、平和についての学びが、生徒の主体的・対話的で深い学びへと繋がったのかについて明らかにしたい。そのために、以下の二つの問いに答えることを本研究の目的とする。生徒が、これまで知り得なかったであろう文化的・歴史的史実に触れることによって、

（Ⅰ）知識と体験の相互作用から、生徒の学びを主体的・対話的で深い学びへと導くことができたのか。

（Ⅱ）「平和とは何か」という問いに対して、自分なりの答えを持つことができたのか。

について明らかにする。また、これらに加え、

（Ⅲ）平和学習での学びを、各教科学習や特別活動などにどのように活かすことができるのか。

についても提示する中で、学校行事と日々の学習とをつなぐ方法についても検討したい。

Ⅳ．舞鶴・敦賀での平和学習の取組み

本取組みは、令和 4 年 9 月 22 日（木）から 9 月 24 日（土）の 2 泊 3 日で行った。平和学習は、一日目に舞鶴引揚記念館、2 日目に敦賀ムゼウムを訪問し、2 日目の夜に宿舎で平和学習のまとめとして、学年代表者による平和についてのスピーチを行う計画とした。以下に、平和学習の詳細について述べていく。

（１）舞鶴引揚記念館での平和学習 ～シベリア抑留についての学び～

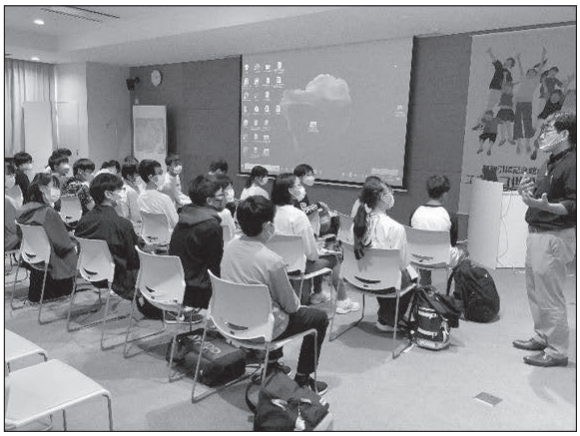
舞鶴は、昭和 20 年（1945）に引き揚げ第一船である雲仙丸が入港してから、13 年間にわたり 66 万人以上もの引揚者を迎え入れた港である。舞鶴引揚記念館は、昭和 63 年（1988）にシベリア抑留と海外からの引き揚げの労苦の史実の継承と平和の尊さの発信を目的として開館した施設である。引揚記念館では、抑留中の日々の様子や心情を和歌で綴り記録した白樺日誌や、抑留者が創作したスプーンなどの食器類、ハーモニカや将棋などの娯楽品など、引揚者の生活や心情を想像できるものが展示されている。また、引揚者からの記録や証言によって再現された生活体験や、コートや帽子、手袋などの防寒着の模型品も保存されている。さらに、シベリア抑留や引揚について、一定の知識はあるが詳しいことは分からない生徒のために、学芸員による講話もあり、教科書やその他の書籍、インターネットなどでは決して学ぶことができないことを学べる施設となっている。本学習では、事前に現地スタッフと学習の目的を共有し、様々なアドバイスのもと、

「聞く」「見る」「触れる」「体験する」の 4 つを軸に学習を進めることが出来た。以下に、それぞれのテーマに関しての具体的な取組み内容を提示したい。

1.「聞く」～学芸員の講話を聞く（35 分）～

記念館を見学するにあたっての基礎知識、「シベリアはどこか」「シベリア抑留とは何か」などの確認を含めた学芸員の講話を聞く時間を設けた。学芸員は終始、生徒の理解を確認しながら、生徒が興味・関心を持って取組めるように、生徒とのやり取りを大切にしながら講話を進めることを意識して下さった（図 4、5）。また講話では、記念館にはどのような資料や展示品があり、どのような体験ができるのかなどについての説明もあり、生徒も様々な問題意識を持ちながら、記念館を見学することができた。本講話は、もっと深くシベリア抑留について知りたいという生徒の動機づけとなり、次のステップである「見る」→「触れる」→「体験する」という学びの段階に結びつけることができた。

（図４）学芸員による講話①



（図５）学芸員による講話②

2.「見る」～ガイドの解説を聞きながらの見学（60 分）①～

記念館内の見学は、生徒 12 人を 1 グループとし、1 グループに対して、一人のガイドを配置し、展示品などの解説を聞きながら見学できるように工夫した（図 6、7）。ガイドをつけることにより、展示品などの解説には書ききれない詳細な情報を聞くことができたり、生徒が持った疑問にすぐに答えてもらえたりすることができるなど、限られた時間の中でのより深い学びを目指した。一方、グループで行動するがゆえの弊害である、自分の興味・関心に基づいて自由に行動出来ない課題が生じることを予め想定し、見学の最後 15 分程度は、自由に行動できる時間を設けた。自由時間になると、生徒がそれぞれ自分の興味を持った場所に移動し、それらについてのさらに詳しい説明を聞くために、近くにいるガイドに積極的に質問する様子が多く見られた。グループ見学から個人の見学へと学びの形を変えるアイデアは、現地スタッフの方々のアドバイスのもと取り入れたものであった。以上からも、本学習活動において、現地スタッフと事前に学習の目的を共有できたことは、生徒の学びを充実させるという視点において、大切なものであったと考える。

（図６）記念館を見学する様子①

（図７）記念館を見学する様子②

３.「触れる」「体験する」～ガイドの解説を聞きながらの見学（60 分）②～

引揚者の証言や記録に基づいて再現された衣装類（コートや帽子、手袋など）の模型品に触れたり、抑留者が過ごしていた住環境や丸太を運ぶ重労働を体験したりと、本物に触れることができるゾーンに、生徒たちはとても関心を示していた。例えば、図 8、9 のように、極寒の中で抑留者が着ていたとされる衣装に注意深く、慎重に触れたり、着たりすることで、その素材や厚みを確認しながら、極寒に耐えられるものだったのかなどを確かめようとする姿が印象的であった。また抑留者が寝ていたベッドを見て、自分のベッドと比較し、その違いに言葉を失う姿（図 10）、食べ物も十分に与えられない抑留者に課せられていた重労働を体験することによって、その過酷さを身をもって実感している様子も見られた（図 11）。

（図８）記念館を見学する様子③

（図９）記念館を見学する様子④

（図 10）抑留者の住環境を見学する様子

（図 11）抑留者の重労働を体験する様子

４.「共有する」～学びや気づき、疑問をアウトプットする活動（15 分）～

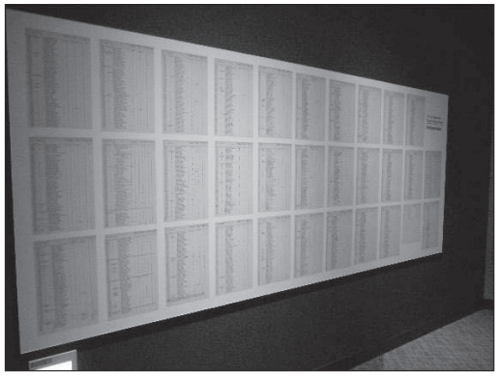
見学後は、学芸員主導による学びのアウトプットが行われた。具体的に述べると、生徒が挙手制で自分が学んだこと、考えたこと、感じたこと、分からなかったことなどを自由に発信し、学芸員からフィードバックを受けるというものである。時間の都合上、数名の生徒のみの発表となったが、図 12、13 のように積極的に自分の学びや考えを語る様子が見られ、今回の学びが生徒にとって充実したものであったと感じることができた。

（図 12）学びを発表する様子①

（図 13）学びを発表する様子②

（２）敦賀ムゼウムでの平和学習
～ポーランド孤児とユダヤ難民についての学び～

敦賀は、1920 年代にロシア革命の動乱によりシベリアで家族を失ったポーランド孤児、1940 年代に杉原千畝が発給した命のビザを携えたユダヤ難民が上陸した港である。敦賀ムゼウムは、2008 年（平成 20）にポーランド孤児やユダヤ難民が敦賀港に辿り着いた経緯や、彼らを受け入れた敦賀の人々のことを伝える目的で開館した施設である。そのため、ポーランド孤児やユダヤ難民の救済の様子を、孤児の日記をはじめとした史料や市民の証言などから学ぶことができる。敦賀の人々が孤児や難民をどのように受け入れたのか、千畝以外にも正義を貫きユダヤ難民を助けた外交官はいたのかなど、これまでクローズアップされてこなかった史実を知ることができる場所になっている。



（図 14）杉原千畝のビザ発給者名簿

敦賀では、学級内で 6 人班（男子 3 人、女子 3 人）を組み、班活動を行った。そのため、敦賀ムゼウムも班ごとで訪問するので、見学にあたっては 6 人班での行動であった。また杉原千畝に関することなど、生徒が一定の知識を持っており、アニメーションを活用した動画資料が豊富な本施設では、ガイドをつけず、生徒が自由に見て回る形式とした。引揚記念館での学習内容に比べると、生徒の元々の知識量が多かった本施設においても、図 14 のような杉原千畝のビザ発給者名簿を見ると、その凄さを実感できた様子がうかがえた。また、アニメーション動画にも関心を示し、興味深く映像を見る姿が印象的であった。

（図 15）平和への想いを書く様子

見学後には、平和への想いを自由にメモに書き、発信できるスペースが設けられていたこともあり、平和への想いや見学を終えての気づきや決意などを綴り、発信する生徒の姿が多く見られた（図 15）。そして、実際に生徒が残したメッセージの一つが図 16 である。「どんなに苦しいことでもその中で見つけた喜びの方が大きいと『幸せ』って言えるのかな？（だから）楽しむ‼」と、今回の学びが自分の今後の生き方に繋がるものとして記されていた。その他にも、「人は大切なものだと思った」「平和は大事。リンゴのように真っ赤な愛を持ちたい」などのような気づきや想いが綴られおり、平和について自分事として捉えながら、今回の学びを今後の生き方に積極的に活かしていこうとする様子を見取ることができた。

（図 16）生徒が綴った平和への想い

（３）学びの共有 ～仲間の声が新たな見方・考え方を発見するきっかけに～

二日間にわたる平和学習を終えた夕食後には、平和について考えたことをテーマにスピーチを行う夕礼（せきれい）を行った。夕礼とは、指定されたテーマに基づいて各学級代表１名がスピーチする学年集会のことであり、泊を伴う本校の行事での伝統となっている。発表生徒は、教員による推薦によって決められる。そのため、教員は生徒の活動の様子を細かく観察し、よい働きをしていた生徒を推薦する必要がある。指名された生徒と教員は、スピーチ前に話す内容について打ち合わせし、本番を迎えるというのが夕礼までの流れである。この日の夕礼では、平和をテーマに２分半から３分のスピーチを行った（図 17、18）

生徒のスピーチを受けて、通常は学年主任によるフィードバックと講話が行われる。しかしながら、今回の講話は副校長からのフィードバックと講話とし、生徒の学びをより深いものへと導くための手立てとした。普段一緒に過ごし、直接的な指導を行うことが少ない副校長の平和についての考え方を聞けたことは、生徒にとって価値あるものであるとともに、生徒が平和を新たな見方から捉えるきっかけとなったことが、事後アンケートや課題作文から見取ることができた（本稿Ⅵ－(1)(2)）。

（図 17）スピーチする生徒の様子①

（図 18）スピーチする生徒の様子②

Ⅴ．アウトプットタスク Tenstagram の取組み
～平和学習を美術・英語へと繋ぐ授業実践～

今や Instagram は生徒にとって身近なコミュニケーションツールとなっている。自分が撮った画像や動画などのビジュアル要素をもとに、キャッチーなフレーズを添えて簡単に自分の想いを世界に発信することができる。受け手は発信した情報に「いいね！」ボタンを押し、相手に共感を示すことで双方向的なやり取りが行えることも魅力である。本校でも、生徒の多くが Instagram のユーザーであるので、生徒にとって馴染み深いものである。そこで、平和学習最終日となる敦賀では、自分が平和を実感できる、平和と感じ取れる風景や事物を写真に収め、後日、“Tenstagram”を作成することをアウトプットタスクとして設定した。Tenstagram という名前は、Instagram を捩ったものであり、附属天王寺中学校の「附天（Futen）」を取り入れ、オリジナリティが出るように工夫した。Tenstagram 作成方法や手順に関しては、宿泊前日に生徒に説明を行った（図 19）。作成に際しての内容面での工夫としては、写真に添える言葉を「日本語＋その他の言語」を使うように指示したことである。その背景には、Instagram が世界への情報発信ツールであることに注目したとき、外国語でも想いを綴る必要があると考えた。外国語には、生徒たちが学んでいる英語を原則用いることを条件とし

私にとっての平和って？

敦賀での平和学習では、一人ひとりが「平和」について、記念館をはじめとした訪問先や学年の仲間との交流などから、深く考えることができると思います。そこで、みんな一人ひとりが考える「平和」を写真に撮り、Tenstagram を作成しましょう。Tenstagram に使う写真の下には、その写真に込めたメッセージを日本語、そして世界へも発信できるように、あなたができる外国語を使って綴りましょう。

科学技術の進歩により、私たちは、どんな物理的距離があろうとも、間近にいるかのように情報を届けられるようになっています。コロナウィルスのような未知のウィルスとの闘いを強いられる現在でも、日々、私たちが使う LINE、YouTube や Instagram、Twitter などを介して、相手と思いを伝え合うことができます。一瞬のうちに、世界中とつながることができるのです。そこには、私たちが学びを共有し、ともに学びを深められる新たなツールになり得る可能性が秘められているのではないでしょうか。

敦賀で、Tenstagram の作成に取組み、宿泊学習終了後には、みんなの作品を共有する機会を持ちたいと思います。一枚の写真と限られた分量のコメントで表すことができるキャッチーな独創性のある Tenstagram を期待します！！

（図 19）Tenstagram 作成に関する資料

たが、生徒の中には、韓国語や中国語を使える生徒がいるので、英語以外の自分が使える言語を用いることも可能とした。本稿Ⅳ－(2) でも述べたように、敦賀では班活動を実施したので、グループに一台、写真撮影をするために i-Pad の貸出しを行い取組みを進めた。

（１）美術科での取組み

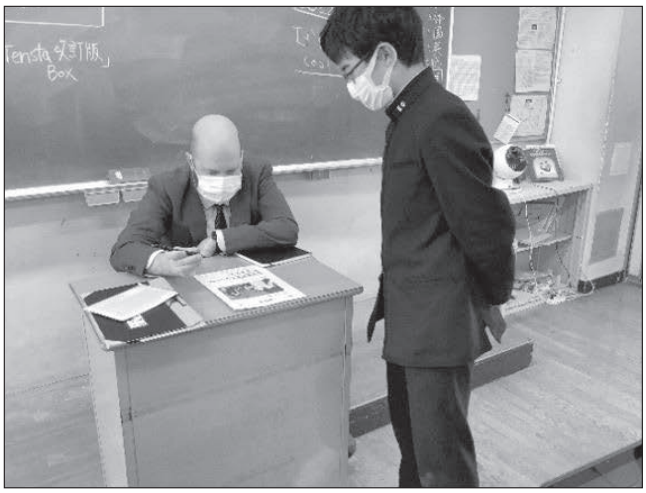
本取組みは、美術科が主体となり活動を進めた。授業で取組んだ際の Tenstagram 作成手順は、以下に示す通りである。第一段階は、生徒が自分で撮影した多くの写真の中から「1 点を選ぶ」ことである。殆どの生徒が平和を実感できる写真を複数枚撮影していたので、最も自分にとっての平和を表現するもの 1 点に絞り込む必要があった。写真決定後は、その写真を通して、自分が実感し感じ取った平和について、読み手により届きやすいよう端的に表した文章を考える作業である第二段階へと進んだ。文章は日本語に加えて、外国語も必要であったので、外国語は辞書を使ったり、周りと協力しながら作成するように指示した。また、文章作成に時間がかかった生徒は、宿題として持ち帰るように指示した。

文章が決まれば、第三段階である文の構成（レイアウト）を考える作業である。大まかなイメージを考えた上で、学習支援ツール「ロイロノート」を用いてタブレットでレイアウト作成し、完成を目指した。完成までに、紙面データ内上部の画像作成も行った。また時間に余裕がある生徒は、アイコン作成を行うように指示することで、より Instagram に近い形での仕上がりを意識した。そうして完成した Tenstagram のデータは、生徒が各自、ロイロノート上で PDF 化し、Google ドライブ内に設定した各クラスの共有フォルダ内へ保存するように伝えた。提出後、各データを印刷したものを英語の授業に持参し、英文添削段階へと繋いだ。

（２）英語科での取組み

英語科では、美術科で作成した紙面上の Tenstagram の英文で書かれた平和への訴えの添削作業を行った。また大阪教育大学の教員に、中国語や韓国語で書かれた生徒の文章の添削作業を依頼した。しかしながら、韓国語に関しては、添削できる教員が見つからず、インターネットによる翻訳機能と韓国語が堪能な生徒本人に頼ることとなった。英文に関しては、Assistant Language Teacher（以下 ALT）とのティームティーチングの時間に添削作業を行うこととした。添削作業前に、ALT 教員に添削を依頼する際の表現、“Please check my sheet.”などの英文を含めた簡単なやり取りを確認した上で、個別の添削活動を開始した。図 20 が添削作業を ALT 教員と一緒に行っている生徒の様子である。

1 学級 36 人であり、添削作業に相当な時間を要することに不安を感じていたが、Tenstagram では、平和への訴えを端的に、キャッチーに表現する大切さを事前に伝えたこともあり、生徒の英文の多くがシンプルな短文で作成されていたので、誤りは比較的少なく、40 分～ 50 分程度で添削作業を終えることができた。そして、添削作業を終えた生徒から、ロイロノート上のデータに修正を加え、Tenstagram を完成させた（図 21）。完成後は、再度、美術科で以前に取組んだようにデータを PDF 化し、Google ドライブ内に設定した各クラスの共有フォルダ内へ保存した。



（図 20）英文チェックを受ける生徒の様子

（図 21）ロイロノートで訂正し、提出する様子

（３）Tenstagram の成果と課題

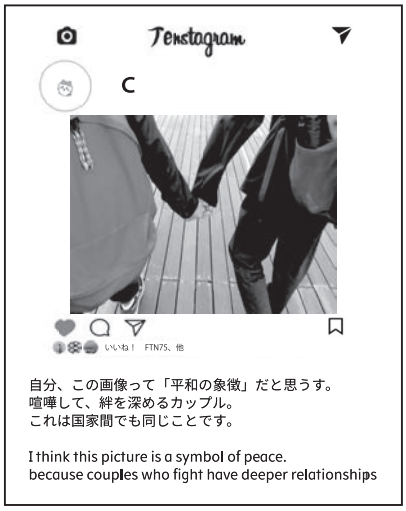
美術科での中心的な取組みによって完成した作品は、学年フロアに掲示し、生徒一人ひとりの学びを全体共有した（図 22）。ここからは、以下に提示する 9 作品から見取ることができる生徒の学びの成果と課題について述べていく。

（図 22）学年フロアに掲示した作品

はじめに、図 23、24 に示した生徒 A、B の作品について述べる。両者に共通していることは、自分が見た風景の美しさに感動した出来事から、自然の美しさに心動かされるのは、世の中や自分の気持ちが穏やかであるからだ、と気づいたことである。金ヶ崎宮を取り囲む木々の間から差し込む陽の光に感動した A、広大な芝生に凛として咲く一輪のたんぽぽの花の存在を見逃さなかった B、ともに辛いことや苦しいこともあるのが人生だと理解した上で、上手く自分の感情をコントロール出来ているうちは、人は自然の美しさに心が揺さぶられ、幸せなホッとできる瞬間を感じることが出来ると考えている。このような平和についての考え方は､後に示す 7 人が考える平和観の「前提条件」になっている。つまり、A、B が考えた「平和は心のゆとりがあってこそ成り立つ」という考え方を土台として、他の生徒が平和についての自身の考えを表現している。

（図 23）生徒Ａの作品

（図 24）生徒Ｂの作品



（図 25）生徒Ｃの作品

（図 26）生徒Ｄの作品

（図 27）生徒Ｅの作品

（図 28）生徒Ｆの作品

（図 29）生徒Ｇの作品

（図 30）生徒Ｈの作品

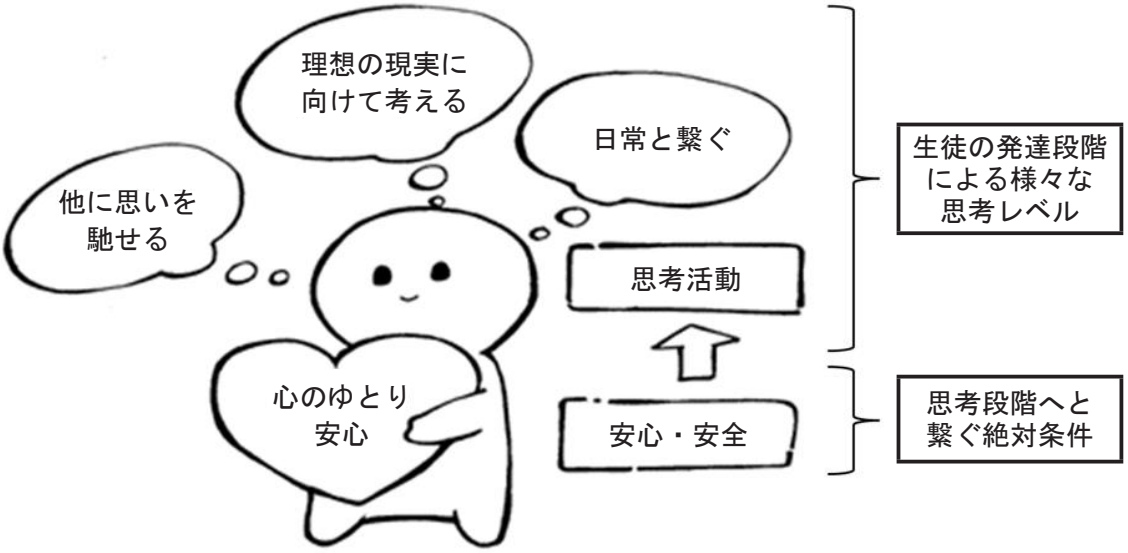
例えば、衣食住に恵まれ、学校に行くことができ、家族や友だちと一緒に穏やかな日々を過ごすことができる生徒 C、D、E、F は、日常生活の中にある当たり前、「手を繋ぐこと」「手紙のやり取りをすること」「落ち葉」に平和を感じている。一人ひとり見ていくと、生徒 C は、手を繋ぐ行為を平和の象徴として捉え、ヒトとヒトとがお互いが言いたいことを言い合える関係を築き、自分を大切にしながら、相手の考えを否定しても相手の存在を否定することなく、分かり合うまでトコトン話し合うことによって愛が深まり、本当の意味で繋がることができると説いている。そしてそれは個人間に限ったことではなく、国家間も同様であると述べている（図 25）。生徒 D も、ポストという身近かなものに目を向け、ポストに手紙を投函すれば、世界のあらゆる場所にいる相手に自分の想いを届けることができることを平和として捉えている（図 26）。「平和＝ポスト」という発想は、愛する人とのハガキでのやり取りに様々な制約を受けていた抑留者に関する学びから来たと推測する。現在のように、いつでも好きなときに、好きな人がどこにいても想いを伝えることが当たり前ではないことに、今回の学習によって改めて気づいたことが分かる。また生徒 E は、活動中にハート型の落ち葉を発見し、落ち葉がたまたまハート形であったことに幸せを感じたと表現している（図 27）。生徒 C、D、E の学びをさらに発展させたのが、生徒 F である。F は金ヶ崎宮から見える風景を見て、その風景の美しさに感動したと述べた上で、敦賀に降り立った孤児や難民たちは、今もあまり変わらない美しい樹木やその隙間から見える海の風景をどのように感じたのか、と今の自分の感情と 80 年前に関する学びとを結びつけ、過去に想いを馳せている（図 28）。このような生徒 C、D、E、F の平和についての考え方はいずれも、生徒 A、B が述べるように、自分の心が一定、安定しているからこそであると捉えることができる。

次に、生徒 G、H の作品についてである。両作品の共通点は、帰還できなかった戦没者への弔意を表す木碑とそれを取り囲むようにして咲く赤い彼岸花に注目していることである。G、H ともに、彼岸花の花言葉である「悲しい思い出」「想うのはあなた一人」という言葉に注目し、平和について想いを巡らせている。個別に見ていくと、G の作品では、大切な人を失い、この先も癒えることのない悲しみを表現しながらも、未来に希望を持ち、平和な世界の実現を切に願う思いが表現されている。このような G の考えを H は、さらに発展させ、平和づくりに自分たちがどのように貢献できるかを説いている（図 30）。また H は、戦争による多くの犠牲者がいる過去は決して忘れてはいけない事実であることを受け止めた上で、理想とする平和を実現するためには、自分自身が幸せになることを大切にする必要があると述べている。つまり H は、世界の平和というマクロレベルの理想の実現は、人々が自分の幸せを見つけていく行為を継続し、幸せを積み重ねてい

（図 31）生徒 I の作品

くミクロレベルのアプローチから迫ることによって目標に近づくことを表現している。「世界が幸せであるために、自分自身の幸せから始めよう」という表現から、自分の日常の見方を変え、日常の中にある幸せを見つけていこうとする決意とともに、自分も平和づくりに関わっていこうとする姿勢を見取ることができ、平和を自分事として捉えていることが分かった。

ここまでに示した 8 作品についてまとめると、生徒の学びを図 32 のように整理することができる。生徒 A、B の考えをよりメッセージ性ある言葉、「平和について考えられるのは、平和なときなんだぜ」と、図 31 で生徒 I が表現しているように、安心・安全が保証されている環境下においてのみ、人は平和について思考を探究することができるのではないだろうか。平穏な学校生活を送る生徒は、本学習で学んだことと、自分の生活とを繋ぎ合わせながら、平和について多面的・多角的な視点から考えられたことを作品を通じて見取ることができた。また、学年フロアで作品を全体共有することによって、様々な気づきを得、生徒の平和についての見方・考え方が深まっていく様子が想像できた。以上から、Tenstagram の取組みは、生徒の平和についての「思考・判断・表現」を高めることが出来たと考える。一方、本学習の学びを教科横断的に取組むことを目指したが、生徒の「思考・判断・表現」という観点で繋ぐ取組みとしては、英語科も含め、美術科以外の教科では出来なかったことを課題として付け加えておきたい。



（図 32）生徒の学びの構成図（絵は生徒作成）

Ⅵ. 成果と課題

本学習の成果と課題に関しては、以下に示した「主体的・対話的で深い学び」の視点をもとに分析を試みる。また成果と課題の見取りは、平和学習実施の事前・事後アンケート、本学習のまとめとして生徒に課した課題作文を用いて行い、定量的評価と定性的評価の側面から分析する。

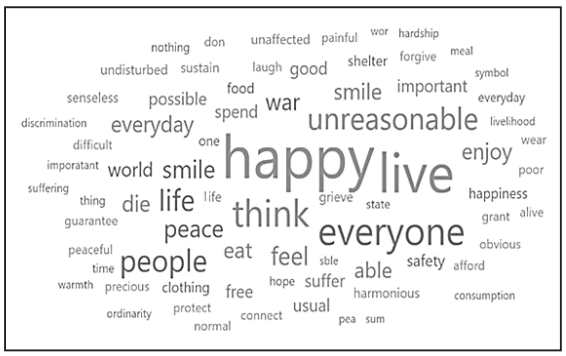
【深い学び】
習得・活用・探求の見通しの中で、教科等の特質に応じて育まれる見方・考え方を働かせて思考・判断・表現し、学習内容の深い理解や資質・能力の育成、学習への動機づけ等につなげる「深い学び」が実現できているか。
【対話的な学び】
子供同士の協働、教員や地域の人々との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自分の考えを深める「対話的な学び」が実現できているか。
【主体的な学び】
学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
（文部科学省 2017）

（1）事前・事後アンケート結果から見える成果と課題

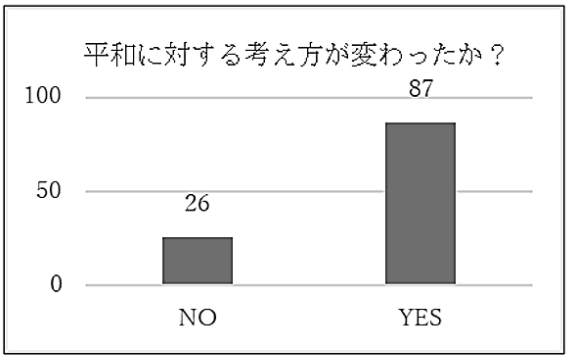
事前・事後アンケート調査は、ともに Google Form を用いて行った。実施日は、事前調査が 2022 年 9 月 21 日（水）、事後が 2022 年 9 月 26 日（月）である。質問項目は、事前・事後ともに共通したものとして、「① What is peace?（平和とは何か）」を英単語一語で回答するように指示した。図 33、34 は、それらの回答をテキストマイニングした結果である。

結果から、宿泊前に見られた「peace=war」に見られたような「平和学習＝戦争」という構図がなくなっていることが分かる。また、「peace=important」という抽象的な見方・考え方もなくなっており、「peace=happy、everyone、think、live」と捉える考え方に変容していることが分かる。このような生徒の見方・考え方の変化をさらに詳しく知るために、事後アンケートでは、「②平和に対する考え方が宿泊学習によって変わったか」、「③平和に対する考え方が変わったとすれば、どのように変化したか」を問う質問項目を追加した。その結果が、図 35、36 である。

（図 33）事前アンケートの結果



（図 34）事後アンケートの結果



（図 35）平和に対する考え方の変化について

知識	シベリア抑留・ユダヤ難民・ポーランド孤児についての学び
思考	新たな平和観の発見
	人権の大切さへの気づき
	安心で安全な生活
	人道・博愛精神の大切さへの気づき
	生き方のヒント
	学年の仲間や教師の講話
	他人事から自分事へ

（図 36）変化の理由：２項目８要素の分類

図 35 から、約 8 割の生徒が平和に対する考え方が変わったと回答していることが分かる。また、考え方が変化した理由を 2 項目 8 要素に分類し、さらにそれを詳細にまとめたものが、表 2 である。

（表 2）平和に対する見方・考え方が変化した理由

項目		回答数
知識	シベリア抑留・ユダヤ難民・ポーランド孤児についての学び	28
	・戦争が終わっても過酷な生活を強いられていた人が沢山いると初めて知ったから。	24
	・戦争によって悲しむ人々は兵隊さんや被害者だけでなく、残された家族も存在すると知ったから。	1
	・平和の裏には必ず昔の人の苦労があると知ったから。	3
思考	新たな平和観の発見	24
	・本当の平和に気がついたから。	3
	・戦争がないだけでは平和とはいえないから。	8
	・平和とは**その人が幸せだなと思ったり、心が豊かであったりすれば平和**なのではないか。	2
	・以前は人々の安全が確保されている状態が平和だと考えていたけれど、もちろんそれも間違ってはいないけど、**気持ちが平和**じゃない場合もあると理解したから。	2
	・行く前は戦争がないことが平和だと思っていたが、行った後は**自由に行動できること**だと変化した。	1
	・平和とは平和だと思っていたけど、今は**衣食住の不便がないこと**だと考える。	1

思考	・平和な時代は何時でもあるわけではない、むしろ平和な今が奇跡の瞬間であることが分かった。だから、**平和とは今生きているということそのもの**だと思った。	1
	・生きることに必死だった人たちを見て、**平和について考える余裕があるのも、平和に暮らしているからなんだ**なと思ったから。	2
	・夕礼で副校長先生が、「平和」に決まった定義はないけど、「私なら与えられた環境に理不尽さを感じないこと」と定義する、と仰っていたから。	2
	・戦争が終わっても、平和（= 自分の生活に必要なものが整っていて、自分に理不尽なことから感じるストレスがない状況）ではない人が多くいることがわかったから。	1
	・夕礼のときにクラス代表の人の話や副校長先生の話を聞いて、平和は戦争が全てではないと改めて思ったから。	1
	人権の大切さへの気づき	3
	・人々が**ヒトらしく自由に生活できた時が平和**なのではないかという考えに変わった。	1
	・すべての人が**自分のやりたい事ができればいい**なと思った。	1
	・**最低限の生活や人権が保証されていることも平和**に含まれていると思ったから。	1
	安心で安全な生活	4
	・戦争がなくなったとしても、すべての人が安全に暮らせるわけではないから。	1
	・宿泊学習前は、平和と聞いて「戦争のない社会」や「私達にとってのゴール」と考えていたが、それはゴールではなく、当たり前であるべきであり、**今世界で平和が当たり前ではなくなっている**ことを悲しく思い、とてもむずかしいことだと思ったから。	1
	・幸せを感じることという意見から、**安心して暮らせること**という意見に変わった。なぜなら、平和ではない空間でも幸せを感じる瞬間があるから。	1
	・戦争がないことだけが平和だと思っていたけれど、宿泊学習をして、命があったとしても**安定した生活が保証されていないと意味がない**と思ったから。	1
	人道・博愛精神の大切さへの気づき	4
	・暗いイメージだけでなく、**助け合っていたということを知れた**から。	1
	・戦争の中にある**人々の喜びや温かさは、何にも代えがたいもの**だと感じたから。	1
	・助けることが全てではなく、**お互いの状況を考えてから行動するのが大事**だと知った。	1
	・過酷な状況でも**お互いに手を取り合って、助け合って笑顔が生まれることが平和**だと、特にポーランド孤児について調べたことで分かったから。	1
	生き方のヒント	6
	・**辛いことの中でも楽しいことを見つけ出す前向きな考え方も大事**だという考え方もできるようになった。	3
	・争いがないことだけが平和だと思っていたけれど、その**争いの中でも小さな平和、幸福があるということを知った**から。	3
	他人事から自分事へ	3
	・平和に関することは今まで他人事だと思っていたけど、**自分にできることを考えることが大事だ**と思った。	1
	・平和は長い歴史からできたものであり、**自分達で作らないといけない**と分かったから。	1
	・**幸せがあるだけじゃ平和にはならない**事に気づいたから。	1

表 2 の結果から、生徒たちが平和について、多面的･多角的な視点から考えている姿勢を見取ることができる。特に、知識レベルであるシベリア抑留･ユダヤ難民･ポーランド孤児についての学びを発展させ、「平和とは何か」について自己内対話しながら、思考レベルである「新たな平和観の発見→人権の大切さへの気づき→安心で安全な生活→人道・博愛精神の大切さへの気づき→生き方のヒント→他人事から自分事へ」と学びを深められていることは大きな成果である。このような学びは、生徒たちが本学習に関心を持って取組み、これまでの学びや経験と結び付けながら、自分が考える平和について主体的に考えようしたからであると推測できる。

また、対話的な学びという視点にも目を向けると、「平和とは何か」について考えを深める際に、夕礼でのスピーチに心動かされたり、副校長が考える平和の定義を聞き、広義の視点から平和を捉えるきっかけを得た生徒も多くいた。生徒の中には、「これまで平和には、人権や命という要素が付随すると考えていたが、先生の考える平和の定義が、『今在る環境、与えられた資源に対して、理不尽さを感じていないこと』と、『理不尽さ』という表現を用いていたことが驚きだった」と述べ、そこから多面的・多角的な視点で平和につい

て改めて考え直そうとする様子が多く見受けられた。生徒たち同士の協働や、教員、現地の人たちとの対話を通じて、生徒の学びが共有され、それが生徒の思考を深めるための大きなきっかけとなっていたことも明らかになった。

以上から、今回の平和学習が、生徒にとって主体的・対話的で深い学びになっていたと見取ることができた。「平和とは何か」というシンプルであるが、漠然とした問いに対しても、どこか他人事であったことが、自分事として考えている様子、また「自分だったら…」と自我関与させながら考えようとしている様子がうかがえたことは大きな成果である。そしてその中で、自分にできることを考えることが大事だと考えたり、平和は自分たちの手で創っていくものなのだと考え、実際に行動を起こしていこうとする姿勢や意欲をみせたりと、平和づくりに貢献していきたいと考える生徒も一定数いたことは、より深い学びへと繋がった結果である。一方、事後アンケートで平和についての考え方に変化はないと回答した生徒 26 名に関しては、本学習実施前から、「平和＝戦争」として捉えるのではなく、平和とは、「人々が幸せであること」「人々が笑顔で過ごせること」「毎日生きている日常」「戦争や暴力などによって社会がかき乱されない状況」「安心な環境が保証されていること」などと捉えていたことから、変化はないと回答していることを付け加えておく。

（２）課題作文からの見取り

次に、課題作文をもとにした成果と課題について述べたい。課題作文は、「私にとっての平和って？」をテーマとして、1200 字程度で作成することとし、「序論（はじめ）」「本論（なか）」「結論（おわり）」という三段落構成でタイトルをつけた上で、自由に記述するというものである。図 37 は、生徒の課題作文のタイトルをテキストマイニングした結果である。また表 3 は、課題作文のタイトルで使われた語彙の出現回数を示したものである。結果から、生徒それぞれが平和について考えを深めたり、その定義や意味について考えたことが分かる。またタイトルに、「見つけ出す」「たどり着く」「気づく」「見つめる」などが見られることから、生徒たちが自分なりの平和についての意味や定義を見出せたのではないかと想像できる。シベリア抑留やポーランド孤児、ユダヤ難民の学習と直接的に関わっている「戦争」の出現回数に次いで、「幸せ」をタイトルに含めた生徒が多いことも、“humanity（人間性）”に焦点をあてた本学習のねらいと繋がっているのではないかと捉えることもできた。そのことは、「幸せ」をタイトルに含めた生徒のうち、4 名が共通して「幸せと平和」というタイトルとし、人々の幸せが平和に繋がっていくと述べていたことからも説明できる。

（図 37）課題作文のタイトルをテキストマイニングした結果

（表３）単語の出現回数

単語	品詞	出現回数
平和	名詞	74
戦争	名詞	9
幸せ	名詞	8
意味	名詞	5
本当	名詞	4
考える	動詞	4
定義	名詞	3
自由	名詞	3
心	名詞	3
生きる	動詞	3
知る	動詞	3

ここからは、生徒たちの課題作文から分析を試みる。生徒たちの課題作文からは、生徒のこれまでの経験や発達段階に応じて、様々な学びの段階があることがうかがえた。以下は、8 名の生徒の感想の抜粋であり、これらの感想から生徒の学びの成果を見ていくこととする。（作文はすべて原文ママ）

【生徒 A】

ぼくは、「終戦の年がわからなかった。」一年生の社会の授業で終戦の年をこたえよ、とあてられた時、分からなかった。知っていないといけないはずのことが分からず、とても恥ずかしかったのが記憶に残っている。 だがしかし、今回の宿泊学習を通して、ぼくが恥ずかしむべきだったところは、「戦争」をただの社会の授業の中の問題だと思っていたところにあると思った。

（中略）戦争が終わり、家族に会えると思ったら極寒のシベリアに連れていかれ、最悪の衛生環境と少ない食料だけで耐え難い重労働を強いられたためだという話を聞いた。あまりにも壮絶で、正直なところ、壮大な作り話を聞かされている気分だった。だがしかし、（中略）それ以上に日本人に対する誇りを感じた。絶望的な状況で、何とか生き延びようと、何とか家族に会おうという気持ちのこもった展示物が何千もあったのだ。ぼくならあきらめている。何もかも投げ出して自暴自棄になっただろう。しかし、彼らはもがいた

のだ。工夫を凝らしたのだ。生き延び、家族に会うために。なんということだろう。強くて、謙虚で、かっこいいと思った。（略） 日々、平和について考えることは、当たり前すぎてあまりないが、その当たり前について学ぶ機会が二日間もあり、よりこの日々を大切に過ごそうと思った。また、それだけでなく、ピンチに陥った時の心の持ち方、日本人の温かさなどを知れてよかった。

【生徒 B】
（略）宿泊学習に行く前、私は平和についてあまり深く考えたことはありませんでした。小学校の課題で、平和についてのポスターを描くというものがありましたが、そこで私は様々な人種の人々が手を繋いでいる絵を描きました。今考えると平和はこれだけではないことは明らかです。宿泊学習の前は平和に対してとても狭い考えしか持っていませんでした。（略）この宿泊学習を通して、自分なりの平和について考えることができました。舞鶴引揚記念館でのシベリア抑留の被験者のお話を聞き、どうしてそんなに辛かった思い出を話せるのかと思っていると、自分なりの楽しみを抑留生活の中で見つけていたから、とありました。ここから、どんなに辛いことでもその中で見つけた幸せの方が大きければ、平和と言えるのではないかということです。ポーランド孤児とユダヤ難民の学びから苦しさと平和は同時にあるとしても、平和が大きい方がお得です。苦しい中の幸せを見つけるために、まずは楽しんでみることが大切だと思います。だから何事もまずは楽しんで、その先に平和を見出していきたいと思います。

【生徒 C】
（略）シベリア抑留に連れて行かれた人々やその帰りを待つ人の心情、難民や孤児たちは何を求めていて、その人たちを助ける人々は何を考えていたのかというものを思ううちに新しい平和について知れた。
（中略）原田さんはシベリアでの抑留先で、苦しい仕事をさせられ、しかも食生活も苦しいという条件下で生きていた。日々死んでいく仲間たち。普通なら精神状態が不安定になっていくのもおかしくない。しかし、原田さんはそこで諦めるのでなく、三波春夫さんの歌を聞くことを楽しみにすることで生きることへの希望を自分で作っていた。必ず生きて帰ろうとする意思、そして創意工夫してさまざまな努力をする姿勢には感動した。この苦しい状況になっても創意工夫をして努力をするという姿勢というのは見習うべきであり、原田さんのような人が増えれば、世界が苦しくなってもお互いに助け合えると思う。
二つ目は、敦賀ムゼウムでの杉原千畝と難民を受け入れた敦賀のエピソードだ。（中略）自分の事情よりも、危険で、大変なユダヤ難民を優先したのである。これは、やろうとしてもなかなかできないことだと思う。それを、杉原千畝はやり遂げたのである。この行動力は、見習って、生活に生かすべきだと思った。また、そのユダヤ難民を受け入れた敦賀の人々の優しさにはさらに感動した。外国人に接するというのは慣れないことだっただろう。しかし、思いやりを持っていた敦賀の人々だったから、優しくできたのだろう。
これらの経験から僕は、真の平和に必要な要素として、創意工夫、行動力、思いやりを挙げる。この要素を、僕も意識したい。

【生徒 D】
（略）私は戦争があった時代に生きていたわけでもなく、その当時を経験した人と話した事さえもないからです。（中略）また、私は昔の戦争のことを知ることの意義を理解していませんでした。しかし、友達の一言に気付かされました。その人は「影があるのならば光が絶対にあるのと同じで、悪い事があるのならばきっと良い事がある。だから、戦争という怖い存在でも知ろうとすることが大事だと思う。」と言っていました。つまり、戦争という怖い存在に目を背けず、知る事で、その裏にある本当の人の温かさに触れる事ができ、平和とはなにかという学習へとつながっていくと、私は考えました。（略）
平和とはなにか、この問いについてもう一度考えてみました。その結果、わたしが出した答えは、辛いことを乗り越えた際にうまれる個々の幸せだと考えます。なぜなら、世界が平和でありたいと思うなら、まずは一人一人が幸せであるべきだからです。（中略）辛いことを自分の足で乗り越え、苦労して手に入れた幸せなら、周りの人も幸せへと動かす力があると考えます。私にとっての平和とは、周りを動かす力を持つ個人の幸せだと考えます。

【生徒 E】
私はこの宿泊学習に行く前は「戦争」に対して、（中略）現代とは思考があまりにもかけ離れていているためなかなか想像したり共感したりすることができなかった。しかし、今回の体験から教科書の中よりももっとリアルな「戦争」に触れることができた。
私は現代と戦争が起きていた時代との大きな違いは「衣食住」だと考えた。（中略）最初見たときこれがマイナス七十度の環境下で着る服とは想像もつかなかった。そしてその横にはロシアの囚人達が着ていたシ

ベリアの気候にふさわしいように思えるコートが置かれていた。この違いは何なのだろうか。（中略）シベリアでは食事をめぐって殺人が起きていたという。食事の内容はよくて塩のスープとヒエのおむすび、ふつうは黒パン一切れ。三食どころか一食もできない日もあったという。現代との違いは火を見るより明らかだった。これでは家畜同然である。（中略）私はホテルの食事を食べさせてもらないながらそう感じた。「住」も悲惨だった。（略）私は、そんな時代を知らずに今まで生きてきたことを恥ずかしく感じた。そして当たり前のように衣服を着、三食食べ、一台のベッドを与えられているこの状態をとてもありがたいことだと実感した。私はこの状況が当たり前だと感じるのが「平和」なのではないかと思う。だが、平和はこれだけではない。例えば心が廃れていたり、穏やかでない状況は決して平和ではないだろう。今回私がたどり着いた「平和」は、氷山の一角だ。氷山はあまりにも大きく一生かかっても全体が見られるものではないだろう。だが、戦争があった時代を後世に伝えていくことは本当の平和につながると確信している。それが私たちの役目だ。

【生徒 F】
（略）平和とは何なのだろう？そう考えた時、頭に平和学習での事が 2 つ浮かび上がりました。1 つ目は 2 日目の夕礼で A さんが発表してくれたスピーチの事です。まとめると、「平和とは、幸せな気持ちが苦しい気持ちに勝っている時のことだ」という内容で、このスピーチを聞いて私はとても共感してなるほど、と思いました。そしてもう 1 つは引揚記念館で聞いた原田さんのお話です。こちらもまとめると、「つらいことも前向きに考えればのりこえられる」という内容でした。シベリアの辛い状況に負けずに強い心と希望を持ち続けられた事にとてもおどろきました。私はこんな命の危機もなく寒くもない今の生活でもつらいことがあったらそれをひきずってしまうことがあります。なのに原田さんはもっと過酷なシベリアの地でそれを実践していたのですから、凄いとしか言いようがありません。この 2 つの特に心に残っている事がらから私は、平和とは心の持ちよう 1 つで変わるものだということを感じ取りました。これらの経験と私の考えを総動員して出した答えは、「平和とは、良い事も悪いことも全てひっくるめて今の人生、生活、悪くないなぁ、幸せだなぁと思えること」です。　実はこの答えにたどり着く 1 歩前の答えは「平和とは幸せであること」という曖昧でふわふわしたわかりにくいものでした。ここからさらに「幸せって何だろう？」という疑問が浮かびました。そしてそれをまるで風船のように持ち歩いていると、ある本でぴったりの表現を見つけました。それは住野よるの『また、同じ夢をみていた。』の中に登場するおばあちゃんが言っていた「幸せっていうのは、あぁ今幸せだなぁって思えること」です。（中略）もちろん私にも嫌なことが多くてしんどい時もあります。でも心の持ちよう 1 つでものの見方は変えられるのです。嫌なことは覚えていても嬉しいことや楽しいことは忘れたり見逃したりしてしまいがちです。けれどつらい時こそ幸せセンサーを敏感にして、いつ、誰に「今幸せ？」と聞かれても「幸せ」だと自信を持って言える。そんな人生を送れたら最高だと思います。

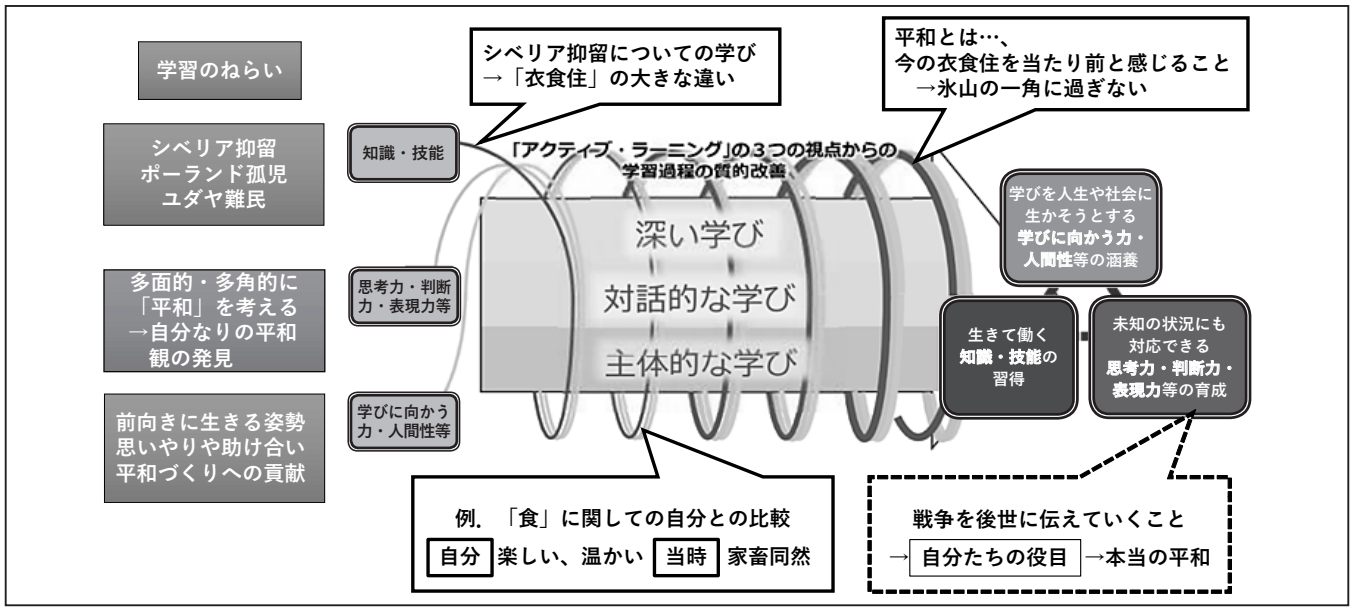
【生徒 G】
私の曽祖父はシベリアの捕虜だった。（中略）曽祖父は戦争の話をしたがらなかった。だが、シベリアで長く働いた人に送られた銀杯をとても大切そうにしていたそうだ。私はこの銀杯に興味を持ち、自分で調べてみたのだが、これといった情報は得られなかった。（中略）「こんなものがなんの償いになるのか。」（中略）想像してみる。自分が青春まっただ中に異国の地へ行かされ、重労働を強いられる。生きる楽しみは固くてお世辞にも美味しいとは言えないパンだけ。そんな生活を何十年もする。やっとの思いで祖国に帰り、しばらくして銀杯が送られてくる。さて、やはりこう思う。「こんなものが」と。このことから今を生きる私の考えと、当時を生きた曽祖父とでは大きく価値観が違ったことがわかる。
私はわがままなんだと思う。今の社会にわがままに育てられたのだ。銀杯では自分の労働のしんどさと見合わないと思うのだ。しかし、曽祖父からすれば生きて帰れたことが何より素晴らしいことであり、銀杯はその記念なのだ。何も、労働の代償を求めていたわけではない。だが、私たちはこれからもわがままでありたい。あるべきなのだ。私たちの次の世代も、その次も、もっともっと先の世代もわがままに育てばいいと思う。良くも悪くも自分ファーストで生きてほしい。死にたくない、大変な思いはしたくない、だから戦争なんてしないでおこう。それでいいのだ。ここで大切なのは、そのわがままをきちんと発信することだ。盛大に国に構ってもらう。それが私の思う「平和」なのである。

生徒の学びの成果として、以下の三つが挙げられる。
一つ目は、生徒一人ひとりの学びが、主体的・対話的で深い学びになっていることである。シベリア抑留やポーランド孤児、ユダヤ難民に関する知識的な学びや当時の人々の生活の様子や心情、また彼らを支える人々のあたたかな行為・行動について学んだことを、これまでの自分の学びや経験・体験などと結び付け、平和についての考えを深めている様子が感想から見取ることができる。具体的に生徒 A、B について述べる

と、「戦争」は社会科で扱うものだと考えていたA、平和についてあまり考えてこなかったBは、平和について主体的に考え、探究しながら、当時を生きていたのが「もし自分だったら…」と、自我関与しながら平和について多面的・多角的に考えている。そして思考を通じて、どんな逆境においても、困難の先にある希望を胸に、前向きに生きる大切さを忘れてはいけないという生きるヒントを得ている。また生徒Cに至っては、これまでとは違う平和についての考え方を見出すことが出来たと述べた上で、引揚者の必ず生きて帰ろうとする確固たる意志と、大変な生活でも創意工夫を凝らしながら周囲と支え合って生きる姿から、前向きに生きることの大切さに加えて、ヒトとヒトとが助け合うことの大切さを実感したことが分かる。またCはさらに思考を深め､平和の実現に必要な三要素を導き出している。自らも貧しい環境下であるにも関わらず、難民になけなしの食料を分け与えていた敦賀の人々の存在を知り、「創意工夫」「行動力」「思いやり」を平和の実現に必要な三要素とし、これらを意識しながら生活していきたいと決意を新たにしている。

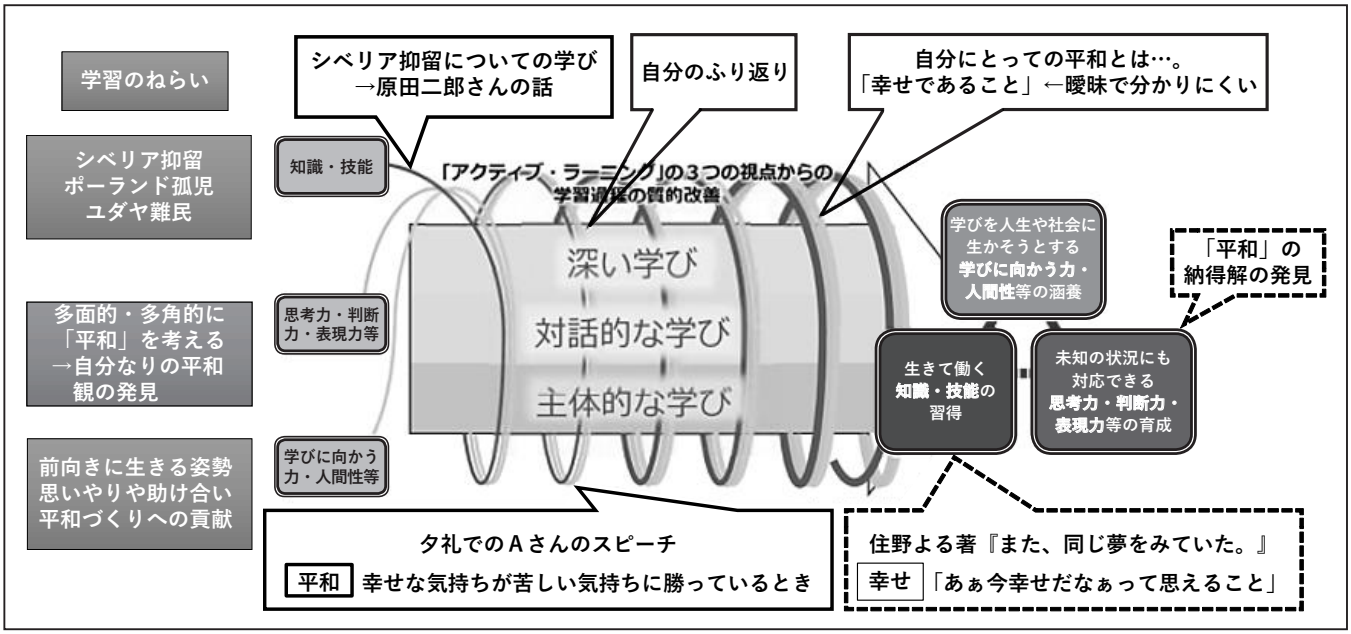
また本学習では、グループ活動による生徒同士の協働、学年代表生徒のスピーチや教師の講話などによって、平和についての多様な見方・考え方を知る機会を設けることで、平和について多面的・多角的に考える手立てとした。その結果、生徒D、Fに見られるような主体的・「対話的で」深い学びを実現することができた。D、Fの記述からも分かるように、知識のみの学びに特化され、対話的な学びがなければ、二人の平和についての今回のような学びは成立しなかったと容易に想像できる。以上のことから、本学習においての生徒の学びは、主体的・対話的で深い学びであったと評価できると考える。

二つ目は、生徒の主体的・対話的で深い学びが、2日間の本学習を通して、以下の図38、39のように、何度も平和についての探究を繰り返した様子がうかがえたことである。生徒E、Fの感想から、具体的に探究のプロセスについて考えていきたい。図38は、Eの学びのプロセスである。Eは、自分にとって身近な「衣食住」という視点から平和について考えている。「食」を例に、Eの学びのプロセスについて分析すると、引揚者のシベリアでの食事と自分の食事との違いを比較する中で、引揚者の食事は家畜同然だったと表現している。このような考えに至ったのは、宿舎で夕食を取っているときであるので、Eが食事中も平和について思考を巡らせていたことが分かる。さらに「当たり前のように衣服を着、三食食べ、一台のベッドを与えられているこの状態を当たり前と感じることが平和」と結論づけた上で、自身の考える平和は、氷山の一角であると述べるように、平和について、多面的・多角的な視点から捉える大切さを実感していることを見取ることができる。その背景には、自分が平和について得た様々な情報や意見にアンテナを貼り、受け止め、思考を深めることの大切さを理解しているからだと考える。またEの大きな成果としては、探究のプロセスもさることながら、以前には戦争は現代と思考がかけ離れていると感じていたが、学習後には、戦争を後世に伝えていくことが平和に繋がり、自分たちの役目だという使命感を自覚していることである。つまり、戦争について知ることの意味や意義を理解し、平和を自分事として考える必要性を実感することを通じて、平和のために自分がすべきことを見出している。



（図 38）生徒Ｅの探究のプロセス（文部科学省 2016 を参考に筆者作成）

次に、生徒Ｆについてである。Ｆは宿泊学習後も「平和」について思考を巡らせ、課題作文作成時に自分なりの納得解を得ている。図 39 からＦの探究のプロセスを見ていくと、Ｆは原田二郎さんの「前向きに考えれば、どんなことも乗り越えられる」という言葉と、夕礼での代表生徒の「平和は心の持ちよう一つで変わる」という考え方に触れることを通じて、自分なりの「平和とは何か」という問いへの答えを導き出している。その中でも注目したいのは、Ｆが「平和とは幸せであること」という答えを導き出した後も、その曖昧さに目を向け、もっと明確にするために自己内対話を繰り返し、「幸せとは何か」について考えている点である。「平和とは幸せであること。では幸せとは何なのか」と、物事の本質を探ろうとする姿勢は、これまでの各教科学習や生活指導の中で学年が大切にしてきた視点であり、その学びも一定、活かされていると推測することができる。そして探究活動を繰り返しながら、住野よるの『また、同じ夢をみていた。』の登場人物のセリフ「幸せっていうのは、あぁ今幸せだなぁって思えること」と結び付け、自分の平和についての納得解を導き出している。このような探究のプロセスが成立したのは、平和学習以降、Ｆの心の片隅に、疑問を考え続けようとする姿勢があったからに他ならない。またＦの大きな成果としては、自分が考える平和を今後の生き方の指針にしようとする思いが見られる点にある。よく物事を引きずってしまう自分の性格も、心の持ち方一つで克服できることに気づき、生きていればしんどいとや辛いこともある現実を受け止めながら、そんなときこそ「幸せセンサーを敏感にして、いつ、誰に『今幸せ？』と聞かれても『幸せ』だと自信を持って言える。そんな人生を送れたら最高だ」と、前向きに生きようとする姿勢を育めたことである。



（図 39）生徒Ｆの探究のプロセス（文部科学省 2016 を参考に筆者作成）

以上のことから、生徒Ｅ、Ｆの学びに見られたように、生徒の学びが一時的なものではなく、継続した学びとなっていることが二つ目の成果であると考える。

そして最後となる三つ目の成果は、今回の学びが様々な発達段階やバックグラウンドを持った生徒にとっての学びに繋がったことである。戦争に関してこれまでに学んだり、考えたりする機会がなかった生徒の学びの成果は、生徒Ｂ、Ｄ、Ｅの感想から十分に見取ることが出来る。一方、生徒Ｇのように、曽祖父がシベリアの捕虜であった生徒にとっても、今回の学びを通じて、自分が思う平和について改めて考える機会になっていることが分かった。Ｇの感想から、先祖たちの努力と苦労のおかげで存在する今、自由に生きることが出来る今を全力で謳歌したい、と強く主張していることを見取ることができる。この主張から、戦争や平和について考える機会がこれまで少ない環境にあった他の生徒には見られない当事者だからこそ伝えることができる力強さを感じることができる。曽祖父との銀杯を巡るやり取り中で、自分が抱いた疑問、怒り、憤り、呆れなど、当事者にしか分からない複雑な感情が表現されており、これから先も「自分ファーストで、自分を大切に生きること」、また未来に想いを馳せ、「未来は今ある様々な課題もクリアになり、もっともっと生きやすい社会であるべきだ」という力強い宣言に繋がったのではないだろうかと、強く感じた。

以上から、本学習を通して、生徒は平和について、自分の身近な問題として捉え、考えを深めることができたと考える。また、生徒の課題作文からも分かるように、それぞれの発達段階やこれまでの経験や体験などに応じた様々な学びの段階を見取ることができた。これまで遠い国の問題や過去の問題など、他人事であった学びが自分たちの生活や生き方に直接的に活かすことができる学びへと変容したことは、とりわけ大きな成果といえる。

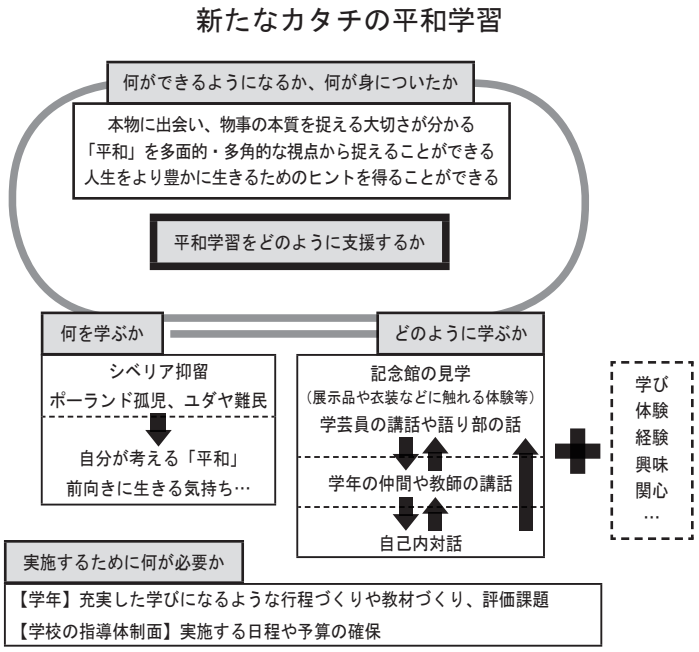
Ⅶ. 考察 ～本研究の目的は達成されたのか～

ここまで、戦争の悲惨さや残酷さについて学ぶ平和学習から脱却し、過酷な状況の中でも未来への希望を胸に、生きることを諦めなかった人々の人生から、自分なりの平和について考えることを目的とした新たなカタチの平和学習の成果と課題について述べてきた。ここでは、本研究を新たなカタチの平和学習として提案するために、本稿Ⅲで示した本研究の三つの目的の達成状況について述べていきたい。また達成状況は、○を 9 割以上、△を 9 割未満、7 割以上、×を 7 割未満の三段階での評価を試みる。

本研究の目的	達成状況
（Ⅰ）知識と体験の相互作用から、生徒の学びを主体的・対話的で深い学びへと導けたか。	○
（Ⅱ）「平和とは何か」という問いに対して、自分なりの答えを持つことができたか。	○
（Ⅲ）平和学習での学びが、各教科学習や特別活動などにどのように活かされているのか。	×△

（Ⅰ）は、生徒への事前・事後アンケートの結果、Tenstagram の取組みの成果、そして課題作文から、その成果を一定見取ることができた。また（Ⅱ）も同様に、事後アンケートの結果と課題作文から、これまで平和についてどこか他人事であった生徒が、平和について自分事として考え、自分なりの平和観を導き出すことができたことが分かり、一定その成果を評価することができる。特に、生徒 E のように、平和を「衣食住」の視点から捉えたり、生徒 F のように本の登場人物のセリフと結びつけるなど、自らの興味・関心や日常と繋ぎ合わせ、平和について多面的・多角的な視点から考える様子がうかがえたことは大きな成果である。また、生徒 A、B、C、D、F のように、平和の実現に向けて、自分から行動していこうとする姿勢や自分の生き方や考え方を変えていこうとする姿が見受けられたことも大きな成果である。今回の学びから得た「創意工夫」「行動力」「思いやり」「しんどい中でも幸せを見つける」など、生徒が自分の生活に取り入れようとすることは、いずれも明日から実践可能な生活をより豊かにする方法である。このように知識的な学びを思考レベルの学びへと発展させ、さらにその学びを実際の行動へと結びつける生徒の姿が見取れたことは、本学習のねらいを達成したと考えることができる。

一方、（Ⅲ）は、Ⅴ－(3) に提示した生徒の作品から、生徒一人ひとりが考える平和についてオリジナリティに富んだものとして表現することが出来ており、本学習のまとめ課題として一定評価できる。しかしながら、今回目指した各教科学習を点と点で結ぶような総合的で横断的な学習の広がりを持った実践の試みという視点からすると、美術科に限った取組みであることから、教科横断的な取組みが十分に出来ていない。この背景には、教育実習などを含めた学校行事との兼ね合いによる時間的な余裕や教師側の教材作成の余裕のなさなどが理由として挙げられるが、生徒の「思考力・判断力・表現力」を高める事前学習や事後学習を、複数教科が横断的に行う必要があったと考える。そのことから、（Ⅲ）に関



（図 40）本取組みの構造イメージ図
（文部科学省 2016 を参考に筆者作成）

しては、課題を残す結果となった。

学習指導要領の中でも指摘されているように、生徒が何を、どのように学び、何ができるようになるのか、何が身につくのかという観点から、生徒の「思考力・判断力・表現力」を高める取組みについて考えると、本研究の目的として設定した（Ⅰ）（Ⅱ）は、一定達成されたと考える（図 40）。しかしながら、（Ⅲ）については、生徒の学びの成果を見取ることができたが、美術科に限定した取組みであったので、カリキュラム面で課題を残す結果となった。

スティーブ・ジョブズは、これまでの経験から「点と点を繋げる」大切さについて述べている。この考え方は、本学習にも応用することができる。生きることを諦めなかった人々の存在、絶望の中でも楽しみや喜びを見つけ、その感情を共有しながら、前向きに生き抜いた人々の姿、そのような人々に手を差し伸べた人たち…、過去の様々な歴史的事実の学びはただの点でしかないが、生徒たちが今回の学びと今の自分を繋ぎ合わせ、一本の線にすることで本学習が成立したといえる。これは生徒の「思考力・判断力・表現力」を高める手立てを生徒に提示することによって、生徒は自分のペースで、周りと協働しながら、探究することが出来たことを意味していると考える。生徒は今後も予測不可能な時代を生き抜き、いずれ社会を担っていく存在となる。だからこそ、生徒にとって、もはや他人事となりつつある戦争そのものに注目し、その悲惨さや残酷さについて考える平和学習から、生徒が平和を自分事として捉えられるような学びをデザインする方向へと移行としていくことが指導者側に求められるのではないだろうか。今後も平和を多角的・多面的な見方･考え方から捉え、より豊かな人生を生徒が歩むことができるヒントに繋がるような平和学習を目指して、「学習設計」「教材作成」「学校行事の実施」「評価課題」に取組んでいきたいと考える。

おわりに

新型コロナウィルス感染症の蔓延により、これまで様々な行事が中止され、生徒の学びの機会が奪われてきた。しかしながら、本学習はコロナ禍であったからこそ実施できたものでもある。実際、コロナ禍でなければ、本校の伝統とされている富士登山に行っていたことだろう。富士登山で日本一の山に登頂すること、山小屋で不自由な生活を体験することも確かに価値あることだ。だが、今回、ロシアによるウクライナ侵攻が続く世界情勢に関心を示していた生徒の姿をきっかけに、本学習が実施できたことを有難いと思えるほどの学びが生徒にはあったと感じている。近い将来、新型コロナウィルス感染症の蔓延をはじめとした未知の困難に遭遇し、様々な制約の中での生活を強いられるときがまた来るかもしれない。そんなとき、苦しいことの先にある希望や幸福を思い描きながら、前向きに生きる気持ち、苦しい中でも些細な幸せを見つけ出し、その幸せを全力で楽しむこと、相手を思いやり、労わる心を大切にしてくれることを願っている。また、平和について多面的・多角的な視点から捉えることが出来たように、今後も物事の本質に目を向け、何事も自分事として考えることを大切にしながら、広い視野で物事を捉え、自分なりの定義や意味を見出すことができる生徒に育てていきたいと思う。平和学習の取組みは、それぞれの学校のカリキュラムマネジメントや地域性に左右されることが多い。だからこそ、平和を自分事として捉えることが出来る優れた実践が多く積み重ねられ、多くの学校が意欲的に取組めるような環境が整っていくことを期待したい。

参考文献

人道の港　敦賀ムゼウム　〈tsuruga-museum.jp〉（2022 年 12 月 27 日）
舞鶴引揚記念館ホームページ　〈m-hikiage-museum.jp〉（2022 年 12 月 27 日）
松崎厳 監修、西村俊一編集代表（1991）、『国際教育辞典』、アルク、p.629-p.633
文部科学省（2016）、「中央教育審議会教育課程部会 資料 2- 学習指導要領改訂の方向性（案）-」〈https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/061/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/07/20/1374453_1.pdf〉（2022 年 12 月 27 日）
文部科学省（2017）、『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 総則編』、東山書房
文部科学省（2017）、「新しい学習指導要領の考え方 - 中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ -」〈https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/__icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf〉（2022 年 12 月 27 日）

School Field Trip to Learn About Peace Studies

― Proposal for a New Form of Peace Education Framing Peace as a Personal Matter ―

TANAKA Mariko

Abstract: This paper presents results and challenges related to students' learning during their school field trip to Maizuru and Tsuruga, conducted this year for junior high school 2nd graders, with the aim of peace education as the core. Students were able to deepen their thinking skills regarding peace as a personal matter by connecting their past studies, daily lives, and backgrounds, reading and seeing authentic records at the site and physically interacting with exhibits made based on testimonies. The students also listened to lectures by storytellers, learning about Siberian internment, Polish orphans, and Jewish refugees. In addition, through listening to the speeches about peace given by their classmates and the lectures by their teachers and accepting the ideas of others, students were given the opportunity to think about peace, and each student was able to derive an answer to the question, "What is peace?" This can be seen in the results of the questionnaires, the assigned essays, and the output task, “Tenstagram.” Through this study, students were able to obtain ideas to live a richer life and to enforce their determination to "live selfishly with themselves!”

Key Words: peace studies, independent and interactive deep learning, inquiry, cross-curricular learning

資料１【事後アンケートの結果：「平和に対する考え方が変わった理由は何か」に対する回答】

シベリア抑留・ユダヤ難民・ポーランド孤児についての学び

・戦争が終わっても過酷な生活を強いられていた人がたくさんいると初めて知ったから。〔23 人〕
・戦時中の人の気持ちや状況を細かく知ることができたから。
・戦争によって悲しむ人々は兵隊さんや被害者だけでなく、残された家族も存在すると知ったから。
・平和の裏には必ず昔の人の苦労があると知ったから。〔3 人〕

新たな平和観の発見

・本当の平和に気がついたから。〔2 件〕
・平和という言葉の価値観が変わったから。
　・平和の反対語が戦争でないことがわかったから。
　・行く前は戦争がないことが平和だと思っていたが、行った後は自由に行動できることだと変化した。
　・全員が幸せになることと前書いたが、幸せになることと平和になることは違うと感じたため。
　・平和というのはその人が幸せだなと思ったり、心が豊かであったりすれば平和なのではないかなと思った。〔2 人〕
　・戦争がないだけでは平和とはいえないから。〔8 人〕
　・戦争がなければ平和だと思っていたが、お互いの意見を許すことができたら戦争は起きないのでお互いが許し合えることが平和だと思ったから。
　・平和の反対は戦争だと考えていたけれど、戦争のすべてが平和の反対ではないし、戦争以外にも平和じゃないことはあると思うから。
　・自分が笑えることだけが平和ではなく、日常的な生活ができることも平和であるとわかったから。
　・行く前は平和とは平和だと思っていたけど、今は衣食住の不便がないことだと考えた。
　・平和とは簡単に壊すことの出来るもので取り戻すのは単独だと難しいものだと考えたから。
　・平和の反対語が、戦争ではない事や、平和ではないことは、世界中に溢れているのではと考えるようになったから。
　・平和の概念は難しいと分かったから。
　・何人かだけが笑顔でいてもつらい思いをしている人がいれば平和な状態とは言えないので、みんなが笑顔でいられる状態こそ平和だと思うから。
　・生きることに必死だった人たちを見て、平和について考える余裕があるのも、平和に暮らしているからなんだなと思ったから。
　・引揚記念館の講話で、苦しい環境にいながらも楽しいことを見つけていたという話が印象に残り、すべての人が幸せであると感じられると平和なのではないかと思ったから。
　・もし戦争がなくても笑顔でいられる世界でなければ平和ではない。
　・平和な時代は何時でもあるわけではない、むしろ平和な今が奇跡の瞬間であることが分かった。だから、平和とは今生きているということそのものだと思った。
　・最初は平和は戦争を起こしてはいけないことだったが、今の平和は人が殺し合いをしないこと、人が人によって苦しまれないことだとわかった。
　・以前は人々の安全が確保されている状態が平和だと考えていたけれど、もちろんそれも間違ってはいないけど、気持ちが平和じゃない場合もあると理解したから。（戦争から帰ってこない夫や息子の帰りを願う女性たちなど）〔2 人〕

夕礼でのスピーチや講話による変容
　・夕礼で副校長先生が、「平和」に決まった定義はないけど、私なら与えられた環境に理不尽さを感じないことと定義する、と仰っていたから。〔2 件〕
　・戦争が終わっても、平和（＝自分の生活に必要なものが整っていて、自分に理不尽なことから感じるストレスがない状況）ではない人が多くいることがわかったから。〔2 件〕
　・夕礼のときにクラス代表の人の話や副校長先生の話を聞いて、平和は戦争が全てではないと改めて思ったから。

人権の大切さへの気づき

・戦争がおきていない状況が平和なのではなく、人々がヒトらしく自由に生活できた時が平和なのではないかという考えに変わった。
・はじめは、すべての人が笑顔でいられることができればそれでいいと思っていたが、そうではないことがわかった。しかし、すべての人が自分のやりたい事ができればいいなと思った。
・武器を持っての争いがないことだけが平和ではなく、最低限の生活や人権が保証されていることも平和に含まれていると思ったから。

安心で安全な生活

・戦争がなくなったとしても、すべての人が安全に暮らせるわけではないから。
・宿泊学習前は、平和と聞いて「戦争のない社会」や「私達にとってのゴール」と考えていたが、それはゴールではなく、当たり前であるべきであり、今世界で平和が当たり前ではなくなっていることを悲しく思い、とてもむずかしいことだと思ったから。
・幸せを感じることという意見から、安心して暮らせることという意見に変わった。なぜなら、平和ではない空間でも幸せを感じる瞬間があるから。
・戦争がないことだけが平和だと思っていたけれど、宿泊学習をして、命があったとしても安定した生活が保証されていないと意味がないと思ったから。

人道・博愛精神の大切さへの気づき

・暗いイメージだけでなく、助け合っていたということを知れたから。
・戦争の中にある人々の喜びや温かさは、何にも代えがたいものだと感じたから。
・助けることが全てではなく、お互いの状況を考えてから行動するのが大事だと知った。
・過酷な状況でもお互いに手を取り合って、助け合って笑顔が生まれることが平和だと、特にポーランド孤児について調べたことで分かったから。

生き方のヒント

・戦争はあってはいけない、ということだけでなく、辛いことの中でも楽しいことを見つけ出す前向きな考え方も大事だ、という考え方もできるようになったから。〔2 件〕
・戦争中は誰も幸せなど手にしていないと思っていたが、少しでも一時でも幸せを感じることが生きるための糧になるため、少しでも楽しみを見つけていた、ということを知り、戦争中でも楽しみを見つけることはとても大切なことなのだと変わった。
・ただ争いがないことだけが平和だと思っていたけれど、その争いの中でも小さな平和、幸福があるということを知ったから。
・シベリア抑留者の原田さんのお話を聞いて、過酷な環境の中でも前向きだったから。
・私達が当たり前のように学校に通っていることが平和だということを気付かされた。
・戦争がなくなることが平和だと思っていたが、戦時中でも楽しみや幸せを見出すことができると気づいたから。

他人事から自分事へ

・平和に関することは今まで他人事だと思っていたけど、今回の宿泊学習を通して自分にできることを考えることが大事だと思ったから。
・平和は長い歴史からできたものであり、自分達で作らないといけないと分かったから。
・三波春夫さんのおかげで元気をもらっていたという話を聞いて、幸せがあるだけじゃ平和にはならない事に気づいたから。

資料２【平和学習のまとめである事後学習の課題作文】

【生徒 A】

「リアル」を知って

ぼくは、「終戦の年がわからなかった。」

一年生の社会の授業で終戦の年をこたえよ、とあてられた時、分からなかった。知っていないといけないはずのことが分からず、とても恥ずかしかったのが記憶に残っている。 だがしかし、今回の宿泊学習を通して、ぼくが恥ずかしむべきだったところは、「戦争」をただの社会の授業の中の問題だと思っていたところにあると思った。昔から暗記が苦手で逃げてきたぼくが終戦年をこたえられないのはただの自業自得である。しかし、戦争自体をただの過去としてみていたことは、間違いだ。昔の日本人たちが日本を必死で守ってくれたからこそ今がある。それを知らないのは失礼に値するだろう。よって、この学習で「平和」について考えたのは、ぼくにとってとても良いことだったのではないだろうか。 その中で、とても印象に残ったことがいくつかある。

まず一つ目は、戦争が終わったからといってすべてが平和になるというわけではないということだ。特に日本は敗戦したのでそのあとは大変だったそうだ。シベリア抑留、引き上げなどたくさんの問題があった。シベリア抑留にあった日本人は約 660 万人。その中で生きて日本に帰ってきたのは約 50 万人だったそうだ。1 割にも満たない。戦争が終わり、家族に会えると思ったら極寒のシベリアに連れていかれ、最悪の衛生環境と少ない食料だけで耐え難い重労働を強いられたためだという話を聞いた。あまりにも壮絶で、正直なところ、壮大な作り話を聞かされている気分だった。だがしかし、それは真実なのだ。受け止めなくてはいけないのだ。また、そんな悲しい真実を聞いて、悲しみも覚えたが、それ以上に日本人に対する誇りを感じた。絶望的な状況で、何とか生き延びようと、何とか家族に会おうという気持ちのこもった展示物が何千もあったのだ。ぼくならあきらめている。何もかも投げ出して自暴自棄になっただろう。しかし、彼らはもがいたのだ。工夫を凝らしたのだ。生き延び、家族に会うために。なんということだろう。強くて、謙虚で、かっこいいと思った。 そして二つ目が引き上げ港にいた人々の温かい歓迎だ。船を出迎えて歓迎し、ねぎらいの言葉をかけたそうだ。引き揚げされたものの中で、知り合いの方が少なかっただろう。しかし、それでも無償で宿を提供してもてなしたその心にほっこりした。

これらのことを学べて、宿泊学習に行った意味はとても大きいのではないかと思った。日々、平和について考えることは、当たり前すぎてあまりないが、その当たり前について学ぶ機会が二日間もあり、よりこの日々を大切に過ごそうと思った。また、それだけでなく、ピンチに陥った時の心の持ち方、日本人の温かさなどを知れてよかった。 これからも、一日にちょっとずつ、今ある平和な世の中について考える機会をもってみようかなと思う。

【生徒 B】

楽しんだ先に

平和とは何か。これはとても難しい問いで、私たち中学生が決めつけられるほど軽いことではありません。逆に、今の世の中をしっかり見つめ、世界のあらゆる問題と向き合って重さを実感し、その上で出した結論ならば、その人が思う平和は間違ってはいないはずです。今回の宿泊学習では舞鶴・敦賀という場所で実際にあったシベリア抑留やポーランド孤児、ユダヤ難民たちの、平和ではない思いや記憶について触れ、向き合って、平和についての考えを深めることができました。

宿泊学習に行く前、私は平和についてあまり深く考えたことはありませんでした。小学校の課題で、平和についてのポスターを描くというものがありましたが、そこで私は様々な人種の人々が手を繋いでいる絵を描きました。今考えると平和はこれだけではないことは明らかです。宿泊学習の前は平和に対してとても狭い考えしか持っていませんでした。

宿泊学習の一日目では引揚記念館を訪れました。ここは第二次世界大戦が終結したときに多くの国や地域にいた六六〇万人もの日本人を帰国させる引き揚げが開始されたときに、引き揚げを受け入れる港の一つとして機能していた場所でした。この引揚記念館では引き揚げられた人たちが残した資料が展示されていて、中でもシベリアからの抑留者にまつわるものは虚しさや痛々しさが伝わってきました。またシベリアからの帰還者のインタビューなどもあり、抑留の過酷さや苦しさを知りました。

二日目は敦賀ムゼウムを訪れました。ここではポーランド孤児とユダヤ難民について学びました。ポーランド孤児たちはシベリアで家族を失い敦賀から入国し、国民からの支援もあり日本で大きくなりました。また、ユダヤ難民は杉原千畝が決死の判断でビザを発給し、日本にやって来ました。ポーランド孤児もユダヤ難民も日本に対して感謝を忘れませんでした。しかし、この感謝は元は苦しい生活をしていたからこそ生まれたものです。苦しさと平和は同時に存在するものなのかもしれないと思いました。

この宿泊学習を通して、自分なりの平和について考えることができました。舞鶴引揚記念館でのシベリア抑留の被験者のお話を聞き、どうしてそんなに辛かった思い出を話せるのかと思っていると、自分なりの楽しみを抑留生活の中で見つけていたから、とありました。ここから、どんなに辛いことでもその中で見つけた幸せの方が大きければ、平和と言えるのではないかということです。ポーランド孤児とユダヤ難民の学びから苦しさと平和は同時にあるとしても、平和が大きい方がお得です。苦しい中の幸せを見つけるために、まずは楽しんでみることが大切だと思います。だから何事もまずは楽しんで、その先に平和を見出していきたいと思います。

【生徒 C】

真の平和

僕は、宿泊学習（平和学習）にいく前は、平和について、戦争をやめて世界みんなで仲良くしよう、核を使うのは悲惨だから、抑えようなどニュースで言われているような消極的なイメージが大きかった。そのような平和も正しいとは思う。しかし、平和学習で学んだシベリア抑留に連れて行かれた人々やその帰りを待つ人の心情、難民や孤児たちは何を求めていて、その人たちを助ける人々は何を考えていたのかというものを思うううちに新しい平和について知れた。僕が最も心に残った活動を二つ挙げながら、僕の考える新しい平和の側面について考えていきたいと思う。

一つ目は引揚記念館での講演で出てきた原田さんの話である。原田さんはシベリアでの抑留先で、苦しい仕事をさせられ、しかも食生活も苦しいという条件下で生きていた。日々死んでいく仲間たち。普通なら精神状態が不安定になっていくのもおかしくない。しかし、原田さんはそこで諦めるのでなく、三波春夫さんの歌を聞くことを楽しみにすることで生きることへの希望を自分で作っていた。必ず生きて帰ろうとする意思、そして創意工夫してさまざまな努力をする姿勢には感動した。この苦しい状況になっても創意工夫をして努力をするという姿勢というのは見習うべきであり、原田さんのような人が増えれば、世界が苦しくなってもお互いに助け合えると思う。

二つ目は、敦賀ムゼウムでの杉原千畝と難民を受け入れた敦賀のエピソードだ。杉原千畝が活躍した頃、ユダヤ人はナチスドイツに迫害されていた。そのことによって、ユダヤ難民となってしまい、行き先が見つからない状況が長く続いていた。しかもビザがないとなかなか他の国に行けず、迫害から逃れられないという難しい状況に陥ってしまっていた。そこで、日本にも

ビザが求められたが、外務省は発給しなかった。しかし、発給しないことを見過ごせなかった杉原千畝は自らの処罰があるかもしれないにもかかわらず、ユダヤ難民に向けてビザを発給したのだ。自分の事情よりも、危険で、大変なユダヤ難民を優先したのである。これは、やろうとしてもなかなかできないことだと思う。それを、杉原千畝はやり遂げたのである。この行動力は、見習って、生活に生かすべきだと思った。また、そのユダヤ難民を受け入れた敦賀の人々の優しさにはさらに感動した。外国人に接するというのは慣れないことだっただろう。しかし、思いやりを持っていた敦賀の人々だったから、優しくできたのだろう。

これらの経験から僕は、真の平和に必要な要素として、創意工夫、行動力、思いやりを挙げる。この要素を、僕も意識したい。

【生徒 D】

周りを動かす幸せ

私は平和とは何かと問われた際、決まって戦争がない事と答えていました。しかし、今思い返してみるとその答えは検討違いだったと考えられます。なぜなら、私は戦争を知らないからです。私は戦争があった時代に生きていたわけでもなく、その当時を経験した人と話した事さえもないからです。しかし、私は戦争を肯定するつもりではありません。けれど、戦争がなくなる事によって全ての人が幸せになるのかと問われれば、違うと私は考えます。理由として、「シベリア抑留」が挙げられます。これは、第二次世界大戦終戦後に起こった出来事で、これにより、多くの人の命が奪われました。これらより、「シベリア抑留」は戦争がない時に起こっているが、多くの人が苦しみ、平和とはかけ離れた状況に置かれていた事が分かります。つまり、戦争が終わったとしても人々が平和になるとは限らないという事です。以上の事より、戦争がなければ平和であるとは一概には言えないと考えられます。

また、私は昔の戦争のことを知ることの意義を理解していませんでした。しかし、友達の一言に気付かされました。その人は「影があるのならば光が絶対にあるのと同じで、悪い事があるのならばきっと良い事がある。だから、戦争という怖い存在でも知ろうとすることが大事だと思う。」と言っていました。つまり、戦争という怖い存在に目を背けず、知る事で、その裏にある本当の人の温かさに触れる事ができ、平和とはなにかという学習へとつながっていくと、私は考えました。例えば、「ポーランド孤児」と「ユダヤ難民」です。この２つの出来事は日本人の行動によって、国境を超え、たくさんの人の命が救われました。特に「ユダヤ難民」についての出来事では、自分の命をかえりみずユダヤ人の命を救った人がたくさんいました。

平和とはなにか、この問いについてもう一度考えてみました。その結果、わたしが出した答えは、辛いことを乗り越えた際にうまれる個々の幸せだと考えます。なぜなら、世界が平和でありたいと思うなら、まずは一人一人が幸せであるべきだからです。つまり戦争は、その立ちふさがる困難の一つに過ぎないと考えます。自分自身が常に幸せでなければ心が貧しくなるからです。そのような状態で、世界人類の幸せを実現させるのは見当違いだと考えます。辛いことを自分の足で乗り越え、苦労して手に入れた幸せなら、周りの人も幸せへと動かす力があると考えます。私にとっての平和とは、周りを動かす力を持つ個人の幸せだと考えます。

【生徒 E】

衣食住

私はこの宿泊学習に行く前は「戦争」に対して、「苦しいもの」や「怖いもの」などのあいまいなイメージを持っていた。だから当然「戦争」の背景やそのときの国の政治などはあまり知らず、また知っている部分は現代とは思考があまりにもかけ離れていているため、なかなか想像したり共感したりすることができなかった。しかし、今回の体験から教科書の中よりももっとリアルな「戦争」に触れることができた。

私は現代と戦争が起きていた時代との大きな違いは「衣食住」だと考えた。まず「衣」の部分を強く感じたのは、舞鶴引揚記念館だった。私はそこでシベリアに連れていかれた日本人の服を見させてもらった。とても驚いた。その服は日本で冬に着るコートの厚さと大差なかったからだ。最初見たとき、これがマイナス七十度の環境下で着る服とは想像もつかなかった。そしてその横にはロシアの囚人達が着ていたシベリアの気候にふさわしいように思えるコートが置かれていた。この違いは何なのだろうか。そもそも、罪を犯した人が囚人として、もしくはそれ以下として扱われているのは大きな違和感を感じる。また「食」も想像もつかない事態であった。現代では食事の時間は楽しいものだ。そして温かい食事が三食食べられることが普通だ。シベリアでは食事をめぐって殺人が起きていたという。食事の内容はよくて塩のスープとヒエのおむすび、ふつうは黒パン一切れ。三食どころか一食もできない日もあったという。現代との違いは火を見るより明らかだった。これでは家畜同然である。もちろん悪いのはそれを管理している人たちだ。そこでは現代では当たり前の人権など存在していなかった。私はホテルの食事を食べさせてもらいながらそう感じた。「住」も悲惨だった。ベッドは寝返りも打てず、ストーブがないところが多かった。そして虫が人間にたかり、血液を吸われていた。それほどに弱っていた。一番驚いたのはその虫が移動する音で人間が死ぬことがわかるということだった。とても恐ろしかった。「死ぬ」ということがあまりにも自分の身に近すぎる。自分が、もしかしたら三分後には死んでしまうかもしれない。そんな状況が存在したことをシベリア抑留を知った後でも信じられなかった。

私はそんな時代を知らずに今まで生きてきたことを恥ずかしく感じた。そして当たり前のように衣服を着、三食食べ、一台のベッドを与えられているこの状態をとてもありがたいことだと実感した。私はこの状況が当たり前だと感じるのが「平和」なのではないかと思う。だが、平和はこれだけではない。例えば心が廃れていたり、穏やかでない状況は決して平和ではないだろう。今回私がたどり着いた「平和」は、氷山の一角だ。氷山はあまりにも大きく一生かかっても全体が見られるものではないだろう。だが、戦争があった時代を後世に伝えていくことは本当の平和につながると確信している。それが私たちの役目だ。

【生徒 F】

幸せは歩いてこない

私は平和学習に行く前まで、平和とは戦争がないこと、だと思っていました。なぜなら戦争がなければ明日死ぬかもしれない、明日まで生きられるかもわからない、なんて不安になることはないと思っていたからです。そしてなんとなく平和の反対は戦争だ、というイメージもありました。 しかし、平和学習に行き、その考えは間違っていると考えるようになりました。なぜならシベリア抑留などをはじめとする、戦争が終わったあとの人々の苦しみに間近で触れることが出来たからです。シベリア抑留、ポーランド孤児、ユダヤ難民など、色々な人の苦しみやつらさの上に先人達がつないでくれた平和がある。そんな考えたらすぐにわかるようなあたり前のことに改めて気付かされました。だからこそ、「平和＝戦争のない世の中」という答えは薄っぺらすぎると感じました。 ならば一体、平和とは何なのだろう？そう考えた時、頭に平和学習での事が２つ浮かび上がりました。

１つ目は１日目の夕礼でＡさんが発表してくれたスピーチの事です。まとめると、「平和とは、幸せな気持ちが苦しい気持ちに勝っている時のことだ」という内容で、このスピーチを聞いて私はとても共感してなるほど、と思いました。そしてもう１つは引揚記念館で聞いた原田さんのお話です。こちらもまとめると、「つらいことも前向きに考えればのりこえられる」という内容でした。シベリアの辛い状況に負けずに強い心と希望を持ち続けられた事にとてもおどろきました。私はこんな命の危機もなく寒くもない今の生活でもつらいことがあったらそれをひきずってしまうことがあります。なのに原田さんはもっと過酷なシベリアの地でそれを実践していたのですから、凄いとしか言いようがありません。この２つの特に心に残っている事がらから私は、平和とは心の持ちよう１つで変わるものだということを感じ取りました。

これらの経験と私の考えを総動員して出した答えは、「平和とは、良い事も悪いことも全てひっくるめて今の人生、生活、悪くないなぁ、幸せだなぁと思えること」です。 実はこの答えにたどり着く１歩前の答えは「平和とは幸せであること」という曖昧でふわふわしたわかりにくいものでした。ここからさらに「幸せって何だろう？」という疑問が浮かびました。そしてそれをまるで風船のように持ち歩いていると、ある本でぴったりの表現を見つけました。それは住野よるの『また、同じ夢をみていた。』の中に登場するおばあちゃんが言っていた「幸せっていうのは、あぁ今幸せだなぁって思えること」です。 今回の平和学習で戦争という暗い歴史について深く学んだからこそ、今の生活はとても安定していて安全だと思います。でも、戦争ほどではなくても苦しい事、つらい事は誰にだってあるでしょう。もちろん私にも嫌なことが多くてしんどい時もあります。でも心の持ちよう１つで、ものの見方は変えられるのです。嫌なことは覚えていても嬉しいことや楽しいことは忘れたり見逃したりしてしまいがちです。けれどつらい時こそ幸せセンサーを敏感にして、いつ、誰に「今幸せ？」と聞かれても「幸せ」だと自信を持って言える。そんな人生を送れたら最高だと思います。

【生徒 G】

わがまま

私の曽祖父はシベリアの捕虜だった。曽祖父は、戦争でシベリアに向かってすぐに捕まえられたため、戦争で銃を握り、戦うという経験はしていないそうだ。曽祖父はシベリアで腸チフスと言う病気にかかってしまい、看病をしてもらえたため、贅沢ではないがご飯もあり、生きることができたと言っていた。向こうでは、主に農作業をしており、最後の方は、死体を埋める作業をしていたと聞いた。それから約二十年の捕虜生活を経て、昭和二十年に舞鶴（日本）に帰国した。そのとき乗った船は、日本に向かう最後の船であったらしく、もしその船に乗れていなければ私たちは生まれていなかったと思うと、なんだか不思議な気持ちになる。

八年前、曽祖父と家族で舞鶴を訪れた。当時、従兄弟が引揚について学習しており、実際に曽祖父の話が聞きたいと舞鶴引揚記念館へ行った。思えばとても貴重な機会であったが、八年前である上に、全く興味がなかったため何一つ覚えていない。そのため今回、宿泊学習で舞鶴引揚記念館に向かうと聞いたときは、曽祖父を感じられるような気がして少し楽しみだった。

曽祖父は戦争の話をしたがらなかった。だが、シベリアで長く働いた人に送られた銀杯をとても大切そうにしていたそうだ。私はこの銀杯に興味を持ち、自分で調べてみたのだが、これといった情報は得られなかった。その代わり、メルカリや他のオークションサイトで売られているのを見た。私が見たものはどれも遺族の方が売ったものだ。遺族である私たちはこの銀杯を見たときこう思う。

「こんなものがなんの償いになるのか。」

実際、確認したサイトでもそのような記載が多く見られた。だから売ろうという気になるのだろう。想像してみる。自分が青春まっただ中に異国の地へ行かされ、重労働を強いられる。生きる楽しみは固くてお世辞にも美味しいとは言えないパンだけ。そんな生活を何十年もする。やっとの思いで祖国に帰り、しばらくして銀杯が送られてくる。さて、やはりこう思う。「こんなものが」と。このことから今を生きる私の考えと、当時を生きた曽祖父とでは大きく価値観が違ったことがわかる。

私はわがままなんだと思う。今の社会にわがままに育てられたのだ。銀杯では自分の労働のしんどさと見合わないと思うのだ。しかし、曽祖父からすれば生きて帰れたことが何より素晴らしいことであり、銀杯はその記念なのだ。何も、労働の代償を求めていたわけではない。だが、私たちはこれからもわがままでありたい。あるべきなのだ。私たちの次の世代も、その次も、もっともっと先の世代もわがままに育てばいいと思う。良くも悪くも自分ファーストで生きてほしい。死にたくない、大変な思いはしたくない、だから戦争なんてしないでおこう。それでいいのだ。ここで大切なのは、そのわがままをきちんと発信することだ。盛大に国に構ってもらう。それが私の思う「平和」なのである。